

## 目次

研究動機.....	2
序論 .....	3-5
第1章 先行研究 .....	6
1.1 先行研究の内容 .....	6-7
1.2 濱田隼雄の文学作品が発表された期間 .....	7
1.2.1 周玟玲 .....	7-8
1.2.2 黄振原 .....	8-10
1.2.3 河原功 .....	10-11
1.2.4 松尾直太 .....	11-12
1.3 考察 .....	12-14
第2章 濱田隼雄について .....	15
2.1 社会運動と濱田隼雄 .....	15-18
2.2 教師と濱田隼雄 .....	18-22
2.3 文学と濱田隼雄 .....	22-30
2.4 メディアと政治 .....	30-34
第3章 作品における教師 .....	35
3.1 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」 .....	35-41
3.2 「病牀日記」 .....	41-45
3.3 「横丁之圖」 .....	45-51
3.4 「行道」 .....	51-55
3.5 「蝙蝠(ぺんしい)」 .....	55-58
3.6 「地球儀」 .....	58-59
3.7 「煙草」 .....	59-60
3.8 まとめ .....	60-62
結論.....	63-66
付録 .....	67-71
参考文献 .....	72-74
謝辞.....	75-76

## 研究動機

日本植民地時代に台湾で発表された文学作品が論じられる場合に、当時の作家が日本の味方につくのか、それとも日本に抵抗していたのかということばかりがよく注目される。そのため、当時の日本政府に味方をして作品を書いたと見なされた台湾文学の作家の多くは「皇民作家」だと呼ばれることが多い。

だが、そうした視点からは、作家にとっての現実が見落とされてしまう危険がある。その時代に生きていた作家たちは自分の意思で作品を書こうとしても書けない状態にあった。本論文の大きな目的は、日本植民地時代に台湾で作品を発表した作家たちが当時の時代背景に影響を受けたことを踏まえながら、作家が持つ考えを明らかにすることである。日本植民地時代の作家を「皇民作家である」、「皇民作家ではない」というような単純な分け方をするのではなく、作家の作品を分析することによって作家の持つ考えや社会に対する思いを明らかにしたい。

では、台湾文学の作家の中でなぜ濱田隼雄を取り上げるのか。濱田はもともと社会主義思想を持っていたが、台湾に来て台湾で発表していた作品が転向の傾向を持つと評される作家である。本論文は当時の作家の持つ思想が果たして簡単に転向したと言えるのかという疑問からスタートするものである。また、濱田は台湾文学史上では西川満と同じぐらい重要な地位を持つ作家であり、西川と共に『文芸台湾』の運営に力を入れた。同時に日本文学にのみ目を向けた当時の日本の文壇に新しい要素をもたらすため、台湾文学の重要性を主張し続けた。その濱田が単に「皇民作家」としてのみ語られるべきではないと考える。

それに加えて、濱田は台湾で教師として働いていた。教師の身分を持っていた濱田は作家として作品を書いたときに、自分自身の経験も作品に入れたと考えられる。社会主義思想を持っていたと言われる濱田が職責として国策に加担せざるを得ない教師という立場に立ったときに、どのような葛藤が生じたのか。そこで、教師に関係する濱田の作品を取りあげて分析をする。

## 序論

日本の文学史において、1933年は社会主義文学が政府の弾圧によって衰退した象徴的な年である。プロレタリア文学の中心人物の一人だった小林多喜二が特高警察に虐殺され、それ以来社会主義的な思想を持つ作品に対する検閲が極めて厳しくなった。そのため、多くの社会主義文学者は転向を余儀なくされた。同年、濱田隼雄は「ジャーナリズムの汚穢と東京生活に幻滅」<sup>1</sup>し、母親とともに台湾に来た。

台湾に来る以前、濱田は東北大学で国文学を専攻していた。だが、在学中は社会主義思想に接近して学生運動に夢中になり、学業をほとんど放棄していた。大学卒業後、彼は上京して雑誌『実業時代』のジャーナリストとして働いた<sup>2</sup>。『実業時代』では社会主義的な思想を持つ評論を多く発表した<sup>3</sup>。

1933年に台湾に来た濱田は女学校の教師としての生活をはじめた。彼は1938年に約1年間の兵役につき、その期間中に小説家になる決心をした。その後、『文芸台湾』『台湾日報』『台湾日日新報』『台湾新報』などの雑誌や新聞で小説を発表し、敗戦を経て日本に戻り、病没するまでの33年間創作を続けた。彼の作品には身の回りのことや糖業政策、日本の農業移民、歴史上の人物や教師などが描かれている。

後述するとおり、濱田に関する先行研究は彼の作品が1940年代に国策に迎合するようになったことを示している。それは濱田が政府の「文学報国」の政策に従って小説を書いたためである。だが、個人の思想の表現が当時の検閲制度に厳しく取り締まられた事実を考慮すれば、濱田には国策に迎合する以外の選択肢はあり得なかった。さらに、彼が国策に従う内容の作品を出したことには、政府の味方になるためだけでなく、体制側の評価を利用して台湾の文芸界の地位を高めようとする意図があったという見方もある<sup>4</sup>。当時、台湾の作家にとって国策への迎合は避けることができないものだった。というのも、当時の台湾での検閲制度<sup>5</sup>は厳しく、作家は自分の命を守るために政府の方針に従って作品を発表するしかなかったのである。濱田が他の作家と同じように政府の方針に従ったのは、そのためである。ただ、彼の作品には国策への追従と同時に社会的弱者に対する関心が見られる。特に教師を描いた作品では、国策に従わなければならない状況と、社会的弱者の

<sup>1</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 25

<sup>2</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 25

<sup>3</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文學」2001年。pp. 24-28

<sup>4</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文學」2001年。pp. 144-145

<sup>5</sup> 台湾での新聞、雑誌に対する検閲については2.4で詳述する。

味方になろうとする気持ちの間で葛藤が生じている。当時の濱田が持っていた葛藤は、これらの作品を分析することで理解することができるだろう。

体制に対して迎合する態度をとる一方、濱田が戦時中に発表した小説や随筆、評論などには弱い立場にある者に対する共感が見られる。例を挙げると、「病牀日記」では当時の台湾社会の中で弱い立場にある湾生<sup>6</sup>の生徒が教師の言葉をきっかけに自分が台湾にいる意味を考えるようになる姿が描かれる。「横丁之圖」では、台湾人に対する差別意識を持つことなく、台湾人の生徒を信用するべきだという理念を持った女学校の教師が登場する。「蝙蝠(ぺんしい)」では、教師が台湾人の少年に台湾人としての誇りを持ってほしいと語る場面がある。随筆「鬼の傷心」と「愚教師迷語録」では、台湾の学校教育における入学試験制度が生徒にとって残酷であると述べられる。

濱田隼雄の文学研究では作品に対する評価がよく問題にされ、いくつかの論文では濱田文学の時代別区分が試みられている<sup>7</sup>。それらの論文は濱田の作品を発表時期ごとに分け、台湾に来る前に発表した作品と台湾に来てから発表した作品に変化が見られると指摘している。そして、とりわけ着目すべきなのは、これらの先行研究が濱田の作品が国策に迎合しているという結論を出しているということである。本論文ではこのような評価とは異なる角度から濱田の小説の分析を行いたい。濱田の作品を国策に迎合しているものとして見ることに異論を挟むつもりはない。だが、それだけでは濱田が社会に対して持っていた考えが見落とされるばかりでなく、国策に迎合するかしないかの間で揺れる葛藤を通して描かれる、戦争に巻き込まれ、協力させられた者たちの声さえも沈黙の中に押し戻すことになる。

ほとんどの先行研究が台湾時代の作品のみを扱っているのに対し、濱田が仙台に戻った後に発表した作品の研究は陳（1998）を除いては少ない。また、戸田（2004）による台湾文学における公学校教師像の分析を除いて、濱田の作品に登場する教師を論じた研究はほとんどない。さらに、台湾の文学作品の中で教師が抱く、国策に従うか社会的弱者の味方になって政府を批判するかという葛藤に着目した研究も存在しない。本論文では濱田が台湾で発表した作品だけでなく、戦後の作品も取りあげる。彼の著作の中から教師と関係する小説や随筆を取りあげ、植民地台湾で生きる日本人教師と台湾人や湾生といった当時の社会的弱者との関係がどのように描写されているのかを明らかにし、濱田が社会に対し

---

<sup>6</sup> 湾生とは台湾で生まれ、台湾で育った日本人を指す。

<sup>7</sup> 例えば、松尾（2001）、黄（1996c）、周（1996）、河原（1998）がある。

て抱いていた考えを解明する。

教師と関わる作品に着目した理由は、当時の教師が権力者の立場にあったからである。当時の台湾教育の官制においては公学校や小学校や高等女学校の教諭に判任の官位が与えられる<sup>8</sup>。そのことから当時台湾の教師が官吏としてある程度の力を持っていたことがわかる。台湾で高等女学校や師範学校の教諭として働いていた濱田も実際に権力を行使できる立場にあった。本論文では濱田をある程度の力を持つ権力者として見なす。濱田の作品を分析することによって彼の持つ権力者意識と社会主義思想との間にどのような変化が生じるのかを中心に論じたい。

台湾に来る以前は社会主義の思想を持っていた濱田は、台湾で権力者である教師として働いた。それは彼にとって矛盾をはらんだ選択であったに違いない。濱田はそうした矛盾を実生活において体験することになったわけだが、教師を主人公とする一連の作品群に描かれた葛藤に焦点をあてることで、これまでとはまったく異なる彼の一面が見えてくる。そこに表れるのは、濱田の中で生まれた国家政策に対する違和感であり、戦争中に自分の意思で自らの生き方を決められない権力者の状況である。作品に登場する教師が権力者としてどのように描写されるのかを分析することで、濱田の持つ葛藤が明らかになるだろう。

濱田の文学が国策に従っているか否かという議論は、本論文では追求しない。本論文は、濱田の作品にある教師の葛藤を手がかりとして、国策に従う中で彼の内心に生じた揺れを考察する。さらに、作中の教師を分析することで、戦争によって国のために犠牲になった権力者の声や、当時の教育制度の下で生じた問題、そして台湾の社会の底辺で生きる社会的弱者が抱く迷いを明らかにする。

---

<sup>8</sup> 台湾教育会（1939）の国語学校官制、台湾総督府中学校官制、台湾総督府高等女学校官制、台湾公立高等女学校官制などを参照。

## 第1章 先行研究

上では本論文の研究動機を述べた。以下では濱田文学に関する先行研究を取りあげ、本論文の主旨とそれらの先行研究との距離を明らかにする。

### 1.1 先行研究の内容

濱田隼雄に関する主な先行研究には、松尾（2001, 2003）、黄（1996a, 1996b, 1996c）、朱（2003）、郭（2006）、戸田（2004）、周（1984）がある。松尾（2001, 2003）および黄（1996a, 1996b, 1996c）は濱田の思想変化に焦点をあて、彼が国策に迎合しており、そうせざるを得ない時代背景があったという観点から論文を展開している。朱（2003）は濱田の作品を通して台湾東部の植民地事業の問題点を考察し、郭（2006）は濱田の作品の歴史的な価値に注目すべきであると主張する。戸田（2004）は植民地時代の台湾の文学作品における公学校教師像を論じている。周（1984）は濱田の『南方移民村』を中心に植民地時代の台湾で作品を発表した日本人作家の思想に言及するとともに、濱田の文学活動の時代区分を行っている。

松尾（2001）は文学者としての濱田の生涯に注目し、作品の分析を通して台湾時代の濱田の作品に「理想的な興味（理想性興味）」<sup>9</sup>と「体制的な興味（體制性興味）」<sup>10</sup>という二つの方向性が存在することを示す。同（2003）では、濱田が台湾で発表した作品に理想的な興味と体制的な興味が見られるという指摘が繰り返されるほか、「蝙蝠翅（ぺんしい）」が内台融和<sup>11</sup>という主題を日本人の視点から描いた唯一の作品であると評価する。

黄（1996a）は『南方移民村』における日本人移民の開拓精神の描写、奉仕精神の強調、国策への迎合、東北方言の使用の四点に着目し、『南方移民村』が政治に歪められた移民政策を批判しようとし、国策に迎合している面もあると主張する。さらに、濱田はリアリズムを意図して『南方移民村』を書いたものの、国策を反映したために移民の生き方を書き損ねていると評する。同（1996b）は、『草創』と戦争や政治との関係を時代背景の側面から解明している。『草創』が単に糖業政策を描いているだけでなく、戦時下政策の

<sup>9</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。p. 117。用語の日本語訳は筆者による。

<sup>10</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。p. 117。用語の日本語訳は筆者による。

<sup>11</sup> 松尾（2003）によれば、「内台融和」とは台湾人と日本人との間で交流を行うことを指す。

宣伝手段でもあったという点を指摘し、同作が総督府の「治績」<sup>12</sup>を宣伝していると主張する。同（1996c）は濱田の台湾在住時代の作品の特徴を挙げ、濱田の作品に見られる思想の変化を描出している。

朱（2003）は「内地人」農業移民に関する『台湾時報』の記事と『南方移民村』を取りあげ、文学とジャーナリズムの対照研究を通して台湾東部における植民事業をめぐる問題を考察する。

郭（2006）は『南方移民村』の史料としての価値に注目する必要があると訴える。『南方移民村』が描く「村」が日本統治時代の鹿野移民村を指しており、同作が日本人の農民が台湾東部で移民村を作り、土地を開墾する過程を記録した作品であると評価し、そのような史料としての価値がほとんど注目されていないと指摘する。

戸田（2004）は、日本統治時代の台湾人作家による公学校を舞台とした文学作品を作品中の教師に注目して分析し、それらの作品が提示する日本語教育史における問題点について検討する。日本語教育という観点から公学校教師のイメージを論じてはいるものの、作品中における教師と他の登場人物との関係を示す描写の分析は行っていない。

周（1984）は、濱田が持つ思想に言及するとともに、『南方移民村』の価値と影響を論じる。

次節では、周（1984）、黄（1996c）、河原（1998）、松尾（2001）が行っている濱田文学の時代区分を対比させ、それらの先行研究における濱田の台湾での文学活動に対する評価を概観する。

## 1.2 濱田隼雄の文学作品が発表された期間

本節では各研究者によって整理された濱田の文学活動の期間を要約し、その中からこの論文に関係する部分を取りあげる。各時代区分には多少の相違があるものの、一つの共通点が見られる。それは濱田が台湾で発表した作品が国策に迎合している点と見なしている点である。

### 1.2.1 周玫玲

周（1984）は作家としての濱田の活動期間を第1期（1927～36年）、第2期（1937～41年）、第3期（1942～45年）、第4期（終戦以後）に分け、その中の第3期に濱田が

---

<sup>12</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 30

当時の国家政策の影響を強く受けていると主張する。

a. 第1期 1927～36年

日本本土では軍部と財閥が連結し、経済の問題が社会に対して大きな影響を与えるようになる。物価が暴落して農民の生活が苦しくなり、失業者が続出する。そのため、日本は南進の拠点である台湾に関心を持つようになる。濱田はこの時期に台湾の経済についての文章を多く書いている。「砂糖か米か」「台湾工業のエネルギー」「内台人労働者の状態」「台湾チャアナリズム点描」「台湾工業の長所と短所」「台湾に於ける小作制度」「台湾に於ける農業戸口の分析」「台湾に於ける農家負債」「茶農を廻るもの」などがそれにあたる。

b. 第2期 1937～41年

このころ、濱田は西川満と知り合い、文学の盟友となる。日本は「国民精神総動員運動」<sup>13</sup>を唱えはじめ、強烈な国家主義の傾向が表面化する。この時期の濱田の主な作品は「病牀日記」「横丁之圖」「公園之圖」「盗難之圖」である。

c. 第3期 1942～45年

この時期に『文芸台湾』に発表された『南方移民村』は台湾文学賞を受賞する。その他に「技師八田氏についての覚書」「ううぼう」「甘井君の私小説」「大東亜文学者大会の成果」「文芸時評」「草創』などの作品がこの時期に発表されている。当時の皇民化運動や戦意昂揚などの時代背景がこれらの作品に少なからぬ影響を与えているという。

d. 第4期 終戦以後

濱田が日本に帰ってから書いた作品には社会主義や農民の苦しみに対する同情が表れている。この時期の代表作には『富ノ沢麟太郎のこと』『宮城県民のたたかい』がある。

## 1.2.2 黄振原

黄(1996c)は評論や作品を通して見られる濱田の思想の変化について、台北高校時代、東北大時代、1933～36年、1937～40年、1941～終戦という五つの期間に分けている。そのうち1937～40年、1941～終戦という二つの時期に濱田の作品から社会主義的な批判が少なくなり、戦争体制に協力する当時の国策の影響を大きく受けるようになったと黄は主張する。

a. 台北高校時代

濱田は台北高校で高校生活を過ごしており、高校の教師たちと一緒に雑誌『足跡』を3

号まで発行している。「『足跡』のころ」<sup>14</sup>によると、濱田が当時の台湾での社会主義運動から受けた影響は少なかったことがわかる。

#### b. 東北大時代

濱田は『文芸十話』で「ぼくの大学時代は、文学者、学者としての修業の時期というより、思想をつかむことの方にひたむきな時期になった」<sup>15</sup>と語っている。また、「東北大学は最後迄/文部省と戦ふ/左傾教授誡首は理由なしと/連袂盟休と廃校を覚悟して」<sup>16</sup>という『河北新報』の見出しが示すように、昭和初期における東北大学での社会主義運動は弾圧を受けつつも続けられていた。この時期に濱田は『法文時報』で「一九三一年学生界の動きを見る」「ファシズムと学生」などの評論を発表する。これらの評論は当時の言論弾圧の下で検閲の対象になることもあった。それでも彼は社会運動に力を尽くし、卒業後も積極的に政治批評を続ける。

#### c. 1933～36年

東北大学を卒業後、濱田は1932年5月に上京する。だが1933年「ジャーナリズムの汚穢と東京生活に幻滅を感じて生活を建て直そうと思い、仙台の母を伴って台湾に渡る」<sup>17</sup>。再び台湾に渡ってきた彼は女学校の教員になる。言うなれば、それまで単なるジャーナリストに過ぎなかった濱田は、植民地台湾において日本人という支配的な立場を得たのである。このために1936年前後に発表された作品には社会主義的な政府批判が薄くなるが、彼は社会主義思想を完全に捨てたわけではない<sup>18</sup>。

#### d. 1937～40年

1937年に日中戦争が勃発する。同年以後、総督府の思想・言論体制は厳しくなる。当時、濱田が『台湾日報』に発表した評論はほとんど社会主義思想と無関係であり、日本の戦時体制を支持する姿勢が現れはじめる。社会を批判する言論活動を行ってきた彼が1941年以降に戦時体制に協力する評論や小説を書くようになったのは、彼が植民地での支配階級に属していたためであるといえよう。それに加えて1938～39年の軍隊生活が濱田に与えた影響も大きい。

#### e. 1941年～終戦

台湾時代の濱田の作品は厳しい検閲を受け、戦時体制に協力する当時の国策に大きく影

<sup>14</sup> 「文芸十話」『河北新報』1971年1月6日。

<sup>15</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 25

<sup>16</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 25

<sup>17</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 25

<sup>18</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）p. 26

響される。『文芸台湾』に『南方移民村』の前半を連載し終わったころ、東京で出版の話が進み、検閲と出版許可の問題からあえて内容を歪曲せざるを得なかったという。このことを濱田自身は「その歪曲のお蔭で当時の出版文化協会の推薦図書になって三版までの用紙増配にありつき、台湾ではじめての台湾文学賞を受けることになったのだが、今なお恥しいことだ」<sup>19</sup>と述べている。

黄は、1941年～終戦の間に発表された評論や小説に戦争中の体制に呼応する主題が見られると分析する。「蕃女圖」「蝙蝠（ぺんしい）」「円公園案内係」など、台湾の景色や事物を主題とした作品においても「皇民化」や「八紘一字の精神」という主題が見られる。

### 1.2.3 河原功

河原（1998）は濱田の作品を初期、円熟期、「暗い時代」、敗戦後という四つの時期に分け、円熟期に書かれた『草創』が植民者の目から描かれていると指摘する。

#### a. 初期

初期の作品には「病牀日記」「南方移民村」「技師八田氏についての覚書」などがある。これらには、台湾社会、とりわけ台湾在住の日本人社会を写実主義的に描く傾向が強く見られる。ところが、この後に長編小説『南方移民村』が書かれるにあたって濱田の文学は変化する。その変化とは、「私が小説を初めてかきだした時、この台湾での人間生活、殊に内地人の生活に対して否定的であった。[中略]そしてやつとのことで、この台湾にも人間の美しい行為の数々があるのをみつけることができた」<sup>20</sup>という濱田自身の言葉が示すとおり、内地人の美しい行為を見つけるようになることである。このような変化は『南方移民村』に反映されている。

#### b. 円熟期

円熟期の作品には「蝙蝠（ぺんしい）」「ううぼう」「甘井君の私小説」「草創」などがある。河原は「この時期の作品には以前には見られなかった落ち着きと味わいが感じられる。作家の存在を肌で感じられるところがあり、作品の出来栄もよい」<sup>21</sup>と評価する。けれども、『草創』には「植民者の目」<sup>22</sup>が存在するとも指摘する。つまり、植民者の立場で当時の糖業政策が描かれているというのである。

<sup>19</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 29

<sup>20</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 319

<sup>21</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 312

<sup>22</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 311

### c. 「暗い時代」

『草創』を発表した後の濱田は「暗い、時代迎合的な作品」<sup>23</sup>を発表する。作品には「爐番」「生産命令」「萩」「兵隊」などがある。文学的な向上を図る場がなく、濱田がその意欲すら喪失していたこの時期を、河原は「暗い時代」<sup>24</sup>と呼ぶ。

### d. 敗戦後

この時期の作品には「木刻画」「台湾軍はまだ停戦せず」などがある。濱田はしばしば自分の周辺の事物をリアルに描いたが、三度の召集体験を持ちながら自らの兵役体験を作品にすることはこれまでなかった。「木刻画」を書き上げておきながら、それを発表することがなかったことが示すとおり、台湾時代の文学活動に対する悔恨を自己の内部に原罪として最後まで持ち続けていた。さらに、「台湾軍はまだ停戦せず」は濱田の台湾との決別を示すものであったと読むことができるという。

## 1.2.4 松尾直太

松尾（2001）は濱田が台湾で小説家として活動した時期を彼の作品の傾向によって初期、中期、後期に分ける。松尾によれば、濱田が台湾で発表した作品には「理想的な興味」と「体制的な興味」があり、初期には「理想的な興味」、後期には「体制的な興味」が強まるという。「理想的な興味」とは彼が持つ批判的精神と社会に対する思想を文学へ反映させることを意味する。「体制的な興味」とは文学を通して政策の宣伝を行い、政府の方針に従って文学報国を行うことである。濱田や西川ら日本人作家は台湾人作家の龍瑛宗や張文環と比べ、より積極的に文学報国を宣伝したと見られている。そして松尾は、濱田の作品が徐々に政府に迎合していく傾向があると結論づけている。以下は松尾の分類をまとめたものである。

### a. 前期（1940年1月～41年）

軍隊生活の中で濱田は知識人としての無力感を抱き、自己に対する自信を失う。それと同時に自らの無知に驚き、教育者および小説家としての再出発を志す。そのため、彼は兵役が終わった後に西川満の誘いで台湾文芸家協会に加入する。濱田のこの時期の作品は「病牀日記」「横丁之圖」「西郷従道」「公園之圖」「行道」「盗難之圖」である。

### b. 中期（1941年～42年11月）

<sup>23</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 311

<sup>24</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 11

1941年2月、濱田は台湾文芸家協会の小説部の理事に就任し、6月には文芸台湾社と文芸台湾賞の審査員を務める。それに加えて、川合三良とともに文芸台湾社の小説評論家になる。こういった背景からわかるとおり、濱田は台湾文芸界でリーダーシップをとっていた。濱田のこの時期の作品は『南方移民村』『蕃女圖』『乏しいけれど』『携帯屈折計』『蝙蝠(ぺんしい)』『ううぼう』『技師八田氏についての覚書』『甘井君の私小説』である。

c. 後期(1942年11月～45年8月)

1942年11月、濱田は東京と大阪で行われた第1回大東亜文学者大会に参加する。同年12月に台湾で行われた大東亜文芸講演会では、彼は皇民奉公会の協力を得て台湾各地で講演を行う。この時期から彼の文学に対する態度が「文学報国」に傾いていく。1943年2月に『南方移民村』で台湾文学賞を受賞した濱田は、同年4月に『草創』を発表して初期の「横丁之圖」や中期の『南方移民村』と決別し、それまでとは異なる創作を模索する。それはつまり、自分の作品を文学奉公のために利用することである。濱田は国策に従う決意をしたのである。この時期の作品は「南山開闢』『草創』『娘の圖』『サプラルヤルセンとサシミダル』『最低限度』『爐番』『少年工』『生産命令』『兵の父』『萩』『畜生』『兵隊』である。

松尾によると、初期の濱田の文学には「理想的な興味」が見られるという。松尾の用語である「理想的な興味」とは台湾文学が日本文学を真似ることなく、台湾の実情をリアリズムの手法で表現することを意味する。つまり、濱田の理想的な興味は島田(1940)が示す「外地文学」<sup>25</sup>と共通点を持ち、台湾において日本文学とは異なる独自の文学を生み出すことが濱田の理想であった。中期になると、「体制的な興味」が生まれはじめる。「体制的な興味」とは国家主義の政策に従うことであり、小説の中で国策に迎合する内容を書くことを意味する。この時期の濱田の文学は理想的な興味と体制的な興味が並存していた時期である。後期になると、濱田の作品からは理想的な興味が失われ、完全に体制的な興味に傾倒するようになると松尾は主張する。

### 1.3 考察

以上の先行研究すべてに共通して、濱田の作品が徐々に国家政策に従うようになっていたことが指摘されている。たとえば、周(1984)は「皇民化運動」「戦意昂揚」などの時

---

<sup>25</sup> 島田 pp. 42-43

代的雰囲気のある濱田文学に対する影響は少なくないと述べる<sup>26</sup>。さらに、河原（1998）によれば『草創』を公表後の濱田は、暗い時代に迎合した作品を発表するようになったという<sup>27</sup>。黄（1996c）も、濱田が1937年以後に台湾の植民者の立場になり、日本政府への批判が見られなくなったと指摘する<sup>28</sup>。松尾（2001）は、濱田が台湾文学の地位を高めるために政治と結びついて「文学報国」の立場をとり、国策に迎合する作品を書いたことを指摘する<sup>29</sup>。

しかし、本論文においては台湾のメディアにおける検閲制度に注目し、濱田が台湾で自分の意志で自由に小説を発表できなかったことを明らかにする。濱田隼雄の文学活動の変化を理解するには、当時政府が台湾の新聞と雑誌に対して検閲を行っており、多くの人が自らの主張を自由に発表できなかったという事実を無視してはならない。当時の台湾の新聞は、台湾新聞紙令に基づいて発行されていた。この政令は新聞を発行する際に保証金を義務づけるものであったため、新聞社の経営には政府からの資金援助が不可欠になり、当時の新聞がほとんど政府と深い関わりを持つようになり、発行された新聞は必ず検閲にかけられた。このような事情のために、当時の新聞は体制側の立場をとることが当然であった。だからこそ、濱田は国策に迎合せざるを得なくなったのだろう。

先行研究にさらに不足しているのは、濱田の作品に登場する教師に着目してその葛藤を明らかにすることである。本論文では濱田の著作のうち教師と関わる7篇「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」「病牀日記」「横丁之圖」「蝙蝠（ぺんしい）」「行道」「地球儀」「煙草」を取りあげて分析し、弱い立場にある人々に対して濱田が持っていた考えを明らかにする。

「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」では日本人教師が国家政策の一環として広東省に行き、命を落としたことが語られる。「病牀日記」では日本人教師が湾生の生徒に影響を与え、その生徒が自分のアイデンティティに対する迷いが起きたときに教師の言葉を思い出し、台湾を愛する決断によって自己のアイデンティティを確立する過程が描写される。「横丁之圖」では女学校教師が台湾の公学校での教育に対する考えが述べられ、日本人教師は台湾人教師と生徒を信用するべきであると語られる。「蝙蝠（ぺんしい）」では植民者と被植民者の関係に焦点が当てられ、作中の日本人教師が台湾人の生徒に台湾人

<sup>26</sup> 周「濱田隼雄の文学を研究する：『南方移民村』を中心に」1984年。p. 93

<sup>27</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998年。p. 11

<sup>28</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 2

<sup>29</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。p. 144

としてのアイデンティティを持たせる様子が描かれる。「地球儀」と「煙草」では日本人教師が敗戦後に直面した立場の転換が語られる。

これら七つの作品には教師が登場する。植民地台湾において日本人教師は権力を持った存在ではあるが、彼らもまた国家政策の犠牲者である。台湾総督府のおかげで強い立場にあったものの、自分の意思とは無関係に国家という枠組みの中での定められた役割を演じている。本論文は濱田の作品に登場する教師が持つ葛藤を論じ、戦時下で社会的に強い立場にあった人々の地位の変化を明らかにし、濱田が持つ社会に対する考えや思想が戦争の勃発によって変わっていないことを示す。

## 第2章 濱田隼雄について

本章では、濱田隼雄の社会運動家としての側面、教師としての側面、文学者としての側面を把握し、台湾での教師／文学者としての生活、敗戦と日本への引き揚げの中で、濱田の思想がどう変化したかを確認する。それに加えて、濱田を取り巻く当時の社会の背景と当時の思想が濱田に与えた影響を概観する。

2.1 は濱田と社会運動との関わりを中心に展開する。先行研究は台湾時代に濱田の思想が変化したと見なしているが、本論文は濱田の作品に表れている濱田自身の思想と当時の社会の間に生じる葛藤を明らかにすることで、濱田が社会主義や社会の弱い立場にある人に共感を抱いていたことを示す。濱田の社会への関心を理解することで、彼の作品から社会的に弱い立場にある人々に対する心遣い、また国家の政策に対して内心に抱いていた疑問が見えてくるだろう。

2.2 では濱田の台湾と日本での教師体験に着目する。濱田自身が教師だったこともあり、教師が登場する作品の多くには彼自身の体験が反映させられている。濱田は作中の教師像を通して社会に対する関心や考えを読者に伝えていると考えられる。

2.3 では濱田が文学や文芸活動に対して持っていた考えに触れる。作家になった濱田が小説や文芸評論を発表した『文芸台湾』は政府の影響を強く受けた雑誌である。そして、濱田の作品が政府の方針に協力するよう見えることも事実である。だが、このことには濱田が台湾の文学者の一員として台湾文学の地位向上を図り、政府の宣伝という体裁をとる形で台湾文学の普及に努める意図があった。2.3 では、それを証明する。

2.4 においては濱田が自分の思想を自由に表現できなかった背景に目を向ける。政府の新聞に対する制限と当時の社会における『文芸台湾』と『台湾日日新報』の位置づけを示し、濱田の作品が国策に従わなければならなかった社会的状況を明らかにする。

### 2.1 社会運動と濱田隼雄

先行研究は濱田の思想が台湾時代に変化したという評価をしているものの、本論文は濱田が台湾で発表した小説や随筆に社会に対する関心が見られ、それが彼が学生時代以来社会運動に関わっていたことの影響であると考えられる。そのため、本節は濱田の人生における社会運動への関与を踏まえ、社会的弱者が直面した不条理や不平等を濱田が作品を通して描き出していたことを明らかにする。1933年、日本では社会主義思想に対する弾圧が厳

しくなり、このことが同年に濱田が台湾に来たことに大きな影響を与えたと考える。以下、奥野（1970）や川西（2001）を参考に1930年代の時代背景を示す。

『濱田隼雄年譜』<sup>30</sup>によれば、濱田と社会主義思想との関わりは1930年の大学入学時にさかのぼる。濱田は島木建作らが開催する読書会に加入し、マルクス主義の文献を読むとともに社会運動家と親しくなった。濱田は1931年8月まで学生運動に熱心に参加し、大学卒業後は東京で記者として『実業時代』に政治、経済問題に関する評論を書いた。ここから見れば、当時の濱田は社会運動に大きな関心を寄せていたことがわかる。

1930年代のプロレタリア文学の弾圧に関して、奥野（1970）は以下のように述べる。

非合法共産党を中心とする政治文化組織をかためたプロレタリア文学に対し、1932年3月から特高警察による政府の大弾圧がはじまり、雑誌など出版物は軒なみ発禁になり、文学者たちはあいついで検挙、投獄され、1933年には小林多喜二が特高の拷問により虐殺された。この弾圧のため、プロレタリア文学の組織は壊滅してしまい、転向者が続出することになり、プロレタリア文学は急速に崩壊してしまった。<sup>31</sup>

1933年には、プロレタリアリストである小林多喜二の拷問による死など、社会主義者に対する弾圧の中で多くの事件が起こった。その結果、多数の作家が転向宣言をするようになった。当時濱田は東京で記者として働いていたが、1933年に「ジャーナリズムの汚穢と東京生活に幻滅」<sup>32</sup>して台湾に来た。このこともその事件に強く影響を受けたものと見られる。

日清戦争後の社会主義思想の影響を受けた日本の社会主義文学は当時プロレタリア文学と称された<sup>33</sup>。プロレタリア文学とは階級、政治の立場から無産者や労働者のための社会主義、共産主義文学を創作しようとした試みである<sup>34</sup>。明治末の日本は日露戦争あたりから工業化し、戦後の経済の恐慌と国際収支の悪化のため、不況に陥った。1914年の第一次世界大戦開戦直後には経済はさらに悪化した。戦中に急速な立ち直りを見せるものの、1919年には戦後恐慌がはじまった。株式、商品相場の暴落、企業倒産、銀行のとりつけ

<sup>30</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 24

<sup>31</sup> 奥野『日本文学史：近代から現代へ』東京：中央公論社、中公新書、1970年。p. 135

<sup>32</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 25

<sup>33</sup> 川西『昭和文学史』東京：講談社、2001年。pp. 239-248

<sup>34</sup> 川西『昭和文学史』東京：講談社、2001年。p. 242

騒ぎが起こった。また、米騒動が発生し、労働争議が急増するなど、労働組合運動が活発になった。1920年代後半には、生活が圧迫された小作人が小作争議を起こし、そこから農民運動が生じた。以上のように明治から昭和初期にかけて日本経済の進展に伴い、社会構造は大きく変化していった。その社会構造の変化によって社会主義が日本に入ってきて、そこから社会主義文学が発生した。当初プロレタリア文学と呼ばれた社会主義文学はこうした背景で生まれ、その後プロレタリア文学運動はいくつかの段階を経た<sup>35</sup>。

プロレタリア文学に対する政府の弾圧は1932年3月にはじまった。同年警視庁に特別高等警察課が置かれ、特別高等警察が社会運動や共産運動、国家主義運動を取り締まった。特別高等警察とは各種社会運動の取り締まりを任務とする組織で、「特高」や思想警察と呼ばれた<sup>36</sup>。当時、特高は公然たる行政機関である。スパイの多用、拷問、行政執行法の濫用などは当時の特高と警察の間では普通であった。特高によって、雑誌などの出版物は発禁にされ、文学者たちは検挙、投獄され、1933年には小林多喜二が拷問により虐殺された。この弾圧のため、プロレタリア文学の組織は壊滅して転向者が続出することになり、プロレタリア文学は急速に崩壊した<sup>37</sup>。

このような時代背景に濱田隼雄も生きていた。1933年、小林多喜二の事件が起きた年、濱田は台湾に渡ってきた。濱田は高校時代に台湾で勉強した経験がある。濱田は台湾で教員として女学校に勤めはじめてからも『実業時代』に経済評論を発表し続けた。その約2年間に台湾で執筆された24篇の評論のうち、19篇は『実業時代』に発表されたものである<sup>38</sup>。『実業時代』に投稿された評論には、まだ社会に対する関心が見られる。濱田がこの2年間に発表した評論は主に植民地時代の台湾における経済を論じている。当時、濱田はマルクス経済学者の矢内原忠雄の影響を受けていたという<sup>39</sup>。そのため、彼の評論は労働者の角度から論じているものが多い。この事実から見れば、濱田が台湾に来た当初は、作品の方向性には大きな変化はなかった。

台湾に渡り、教師という支配階級の地位を得て統治者の立場になったために、日本で書かれた評論に見られたような政府に対する濱田の批判が弱まったと黄（1996c）は考える

---

<sup>35</sup> 奥野（1970）によれば、プロレタリア文学運動とはマルキシズムのイデオロギーや、世界初の社会主義国ソビエト連合のコミンテルンの指令や、その指揮下にある非合法日本共産党の政治方針や状況判断の強い影響を受け、複雑な分裂、統合を繰り返しながら、急進的なマルキシズム文学者たちの機関誌『戦旗』によるナップ（全日本無産者芸術連盟）と労働者出身の作家たちが中心の「文芸戦線」（労農芸術家聯盟）の二つに分裂し、激しく対立するようになる。（pp. 116-117）

<sup>36</sup> 百瀬『事典昭和戦前期の日本：制度と実態』東京：吉川弘文館、1990年。pp. 126-127

<sup>37</sup> 百瀬『事典昭和戦前期の日本：制度と実態』東京：吉川弘文館、1990年。pp. 126-127

<sup>38</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。pp. 24-25

<sup>39</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。p. 29

40. これに対して松尾（2001）は、濱田は台湾で台湾人より高い身分となったが、政府高官や警察の人間に比べれば地位が低かったため、彼の体制に対する批判は弱くはならなかったという見解を示している<sup>41</sup>。台南第一高等学校に勤務し、日中戦争が勃発するまでに濱田が『実業時代』に発表した経済評論を通して批判を行った対象は、日本の帝国主義と台湾の封建的な農業の慣習であった。

以上のように、黄（1996c）と松尾（2001）は濱田の政府批判の変化について異なる論点を示す。本論文では、濱田の台湾での作品は彼が以前から持っていた思想をそれまでとは異なる形で表現していると判断する。一見、政府の立場で作品を発表しているように見えるが、作中には政策に対する異論や社会的弱者が受けた不合理な待遇が描かれている。検閲制度の厳しい当時、社会における権力者側と社会的弱者との関係を表現するためには、政府に賛同するという建前が必要であったといえよう。また、台湾の文壇の変化によって台湾文学が日本文学とは異なる独自性を確立しようとしていたため、濱田は台湾文学が評価を受け、大東亜文学の下にある台湾文学の持つ役割の重要性を明確にすることを望んでいた。濱田が政府を支持する立場を取ったのは、そのためであったのではないか。戦後日本に戻った後でも彼は創作を続けるとともに、文学者の政治に対する姿勢を重要視し、社会運動にも力を出した<sup>42</sup>。このことも濱田の社会に対する態度が学生時代の社会主義思想から戦後まで一貫していることを示している。

本節では、濱田の社会運動への関わりに言及し、彼の社会に対する関心が時代の変化の影響を受けず、一貫していることを示した。次章では作品の分析を通してより具体的に政府に対する濱田の考えを明らかにする。

## 2.2 教師と濱田隼雄

濱田が発表した多くの作品には教師が現れる。濱田は教師としての経験を持っており、その経験が作品に反映されていると思われる。台湾に渡ってきた濱田は義兄の知人の紹介で教員になった。彼が台湾で勤めたのは静修女学校、台南州立台南第一高等女学校、台北

<sup>40</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）。p. 26

<sup>41</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文学」2001年。pp. 32-33

<sup>42</sup> 濱田は「市民の文化をつくる会」の副会長になり、日本民主主義文学同盟の仙台支部長になり、日本ベトナム友好協会宮城県連合会長になった。さらに、日本ベトナム協会文団連等の会合にも出席し、選挙に関する後援会や大学共闘会議に出席した。そして、1972年に宮城県ではじめて共産党議員が誕生した際に、彼は「文学者としての政治への参加がひとつの実を結んだことを喜ばずにはいられなかった。そのためには我身の疲労をかえりみるいとまはなかった」という発言をしている（濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 32）。

州立台北第一高等女学校そして台北師範学校である。日本に戻った後も濱田は文学者としての活動と並行して教職を続けた。濱田の文学活動や文学に対する考えは2.3で詳しく説明する。本節では濱田の台湾と日本での教師体験について考察する。

萬里(1943)を見ればわかるように、濱田は生徒に対して日本語を教えたのみならず、生徒に対して思いやりを持って接し、多くの生徒から信頼関係を得ていた。萬里は濱田の教師生活について次のように述べる。

彼は現在は臺北師範學校教授であるが、つい最近まで臺南や臺北で女學校の教諭として女子の教育に攜はること七八年である。だから濱田氏の一面にある女子教育者としてのモラルを見逃してはならぬ。仙臺の中學、臺北高校の文科を出てゐるから、國語教師であるのは當り前のわけであるが、廣い教養を授けねばならぬ女子教育において彼は單に國語にとどまらず心ゆくまでにこの女の子達に彼の情熱を傾けたのである。だから女生徒には絶対に信頼されたやうであるし、卒業後も彼を圍むこれら教へ子の集ひの美しさは、床しい話として知られてゐるのである。<sup>43</sup>

以上のように、濱田は教育を重視する真面目な教師であった。女学校において彼は情熱を傾けて指導を行い、生徒に信頼されていた。この評価を通して、濱田は国語を教えるほかに生徒が学校で生じた悩みや問題などを重視し、生徒に信頼されていたことがわかる。この濱田の姿は、彼の小説や随筆に登場する教師にも投影されている。作品に登場する教師を分析することで、濱田が持つ学校教育に対する考えや教師としての理想が窺えるだろう。

濱田が台湾で発表した随筆には生徒に対する愛情ある目線が見られる。たとえば、随筆「鬼の傷心」には彼が一人の教師として生徒を心配する様子が描かれる。

ラヂオが名前を呼び上げる、配達される新聞が麗々しく落地者の烙印を押してゐる。と來ては實に我慢がならない。親切からとはわかつてゐても、一方では再び溜息を吐かなければならぬ人々の多いことを考へると、臺灣

---

<sup>43</sup> 萬里 p. 11

的なかうしたやり方が實におぞましい。<sup>44</sup>

この随筆には、生徒の入学試験の結果を見るのがつらいので、結果が発表される前に早めに家に帰ると述べられている。新聞やラジオを通した入学試験の結果発表によって生徒の落第を知るのが「我慢がならない」と語られるように、濱田が台湾の入学試験制度に対して強い疑問を持っていることが窺える。

「鬼の傷心」では、ある少年との偶然の出会いが描かれる。作者が少年に声をかけたとき、少年は「合格しなかつたので心も重く家の中にみたのを、夕方氣ばらしに外にちつと立つてみた」<sup>45</sup>とこころであった。作者は声をかけたことを悔やみ、「柄になく聲を掛けたばかりに、せつかくあきらめかゝつてみた彼の心を、無慘に再び地獄に落し込んだのである」<sup>46</sup>と感じて少年の前から逃げ出す。ここで描かれる濱田は、台湾で教師として高い社会的地位にあるにもかかわらず、生徒に対する差別意識は感じられない。むしろ、生徒の持つ悩みや試験制度による苦勞に目を向け、生徒を心配する様子が見られる。

一方、この随筆からは入学試験の結果を待つ生徒が抱く不安がラジオと新聞の報道によってさらに高められていることがわかる。作中でメディアは生徒の不安を煽っている。民衆に対するメディアの影響の大きさは、台湾総督府も認識していた。台湾のメディアに対する制限が厳しくなったのは、そのためであろう。この随筆の中で濱田は、入学試験の結果を報道することが生徒の不安を一層高めると批判している。だが、後述するように現実には台湾総督府によるメディアに対する厳しい検査が行われるため、濱田は自分の意志で発言できない状況にある。

「愚教師迷語録」においても教師としての濱田の試験に対する見解が述べられる。

われわれの提出する問題は、小さな魂が何を知らぬかを剔抉するためのものではない。難問をもつて、学校の高級なることを誇示するためのものではない。

われわれは、その為ために小さな魂の血の氣の失せるやうな問題は出さない。

そのための、特別な準備の要る難問は、われわれの好むところではない。

われわれは、一人でも多く、この門に入り得る資質のあることを發見する

---

<sup>44</sup> 「鬼の傷心」 p. 44

<sup>45</sup> 「鬼の傷心」 p. 46

<sup>46</sup> 「鬼の傷心」 p. 46

ために試験をしよう。<sup>47</sup>

「愚教師迷語録」では、両親や周囲の人間が子どもに与える重圧に対する濱田の違和感が描かれる。試験結果が出るまでの間、子どもは周囲の期待を背負い、落第した場合には周囲の噂話に耐えなければならない。子どもにとってそのような試験制度は地獄のようなものであっただろう。濱田の意見では、試験問題とは生徒を困らせるためのものではなく、学校の高級さを誇るためのものでもない。また、生徒の自信を失わせるべきでもない。教師は子どもが学校の「門に入り得る資質のあることを発見するため」に試験をするのである。この随筆からもわかるように濱田の持つ理想的な試験制度とは子どもの資質を発見することである。ただし、そのような試験制度が現実には存在していないため、濱田は生徒を心配している。濱田は前述したとおり生徒と信頼関係を築いていたのみならず、生徒の資質を潰しかねない試験制度に反対していた。

続いて、周囲の人間が子どもを試験で苦しめる状況を作っていると濱田は述べる。両親や親戚が子どもの試験に対して必要以上に關心を持っていると濱田は考えている。

**試験を惨酷なものにしてゐる犯人は、子供の周囲にあるのではなからうか。  
父や母が、血相を変へて鞭撻することは、親ごころとして許せもする。が、  
向ふ三軒兩隣から、親類縁者はもとより、知る人のすべてが、子供の及落  
に必要以上の關心を持つてゐはしないか。<sup>48</sup>**

子どもは試験のためにあらゆる努力をするが、両親が子どもに厳しい要求をしていることがこの引用からわかる。台湾のこういった試験制度の中で、生徒に最も大きな苦勞を与えているのが彼らの両親である。周囲の人々は子どもが勉強を通して何を習得するのかということより、試験の結果ばかりを重視する。試験をする本当の目的を無視する両親や周囲の人に対する濱田の批判がこの随筆からわかる。さらに、濱田は親子関係について次のように述べる。

**親が「落ちたらお父さんが恥しい」といふことすら、許せないことではな**

<sup>47</sup> 「愚教師迷語録」1940年3月29日。

<sup>48</sup> 「愚教師迷語録」1940年3月30日。

いか。親が子の犠牲になることはあつてもいい。が、子を親の犠牲にすることは、誰が許してゐるのか。親には親のモラルがあるべきである。[中略]狼狽し、騒ぎ立て、小さな魂を戦慄させる親は、試験が近づくまで子供の教育に、正しい關心を持たなかつたものであるに違ひない。<sup>49</sup>

子どもに「落ちたらお父さんが恥しい」と言う親に対し、濱田は「親が子の犠牲になることはあつてもいい。が、子を親の犠牲にすることは、誰が許してゐるのか」と訴える。彼は親が子どもの試験をめぐって体面を気にすることがよくないと考えており、子どもの試験の結果しか見ない親は子どもの教育に「正しい關心」を持ってないと批判している。

以上の随筆から、濱田は試験で苦しむ子どもに教師として深い同情を寄せていたことがわかる。さらに、親が子どもの試験の結果ばかりを気にして試験の本来の目的を見失っているという意見が述べられる。この二つの随筆から、濱田が教師として生徒を思いやる気持ちを抱いていたことが理解できる。濱田が教師生活のかたわら小説の創作をはじめたのは1939年以後のことである。濱田は戦後も女学校の教師になり、学校に勤めながら文学活動を続け、また社会運動に対する關心を抱き続けた。このように濱田は台湾にいても日本にいても教師として生徒の指導をした。教師であると同時に文学者でもある濱田は、教師としての自己を作品に投影したといえるだろう。換言すれば、濱田は、自らの考えを作中の教師を通して読者に伝えようとしたのではないか。そこで、作品に登場する教師の分析によって、社会に対する濱田の考えを考察する。

### 2.3 文学と濱田隼雄

濱田は1935年から『台湾日報』で俳句や文芸時評を発表し、1938年2月に西川満と知り合う。同年10月に兵役に入った後、読書の時間が増え、多くの本を読んだ。このような兵役生活の中で彼は教育とともに文学によって「自己を發展せしめようと決意する」<sup>50</sup>。その後、西川に台湾文芸家協会への入会を誘われ、濱田は『文芸台湾』で小説を発表するようになった<sup>51</sup>。濱田は『文芸台湾』のほか、『台湾日日新報』をはじめ多くの新聞や雑誌で作品を発表した<sup>52</sup>。本節では濱田が『文芸台湾』に発表した評論「大會の印象」

<sup>49</sup> 「愚教師迷語録」1940年3月30日。

<sup>50</sup> 濱田淑子『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社、1984年。p. 26

<sup>51</sup> 井出『決戦時期台湾での日本人作家と皇民』台南：台南市立圖書館、2001年。pp. 39-40

<sup>52</sup> ほかに『台湾時報』『台南新報』『台湾日報』『台湾鉄道』『若草』『丹頂』『東北文学』『仙台文学』な

「大東亜文學者大會の成果」「文化時評」「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」から戦時中の文学に対して彼が感じた使命や文学者としての理想を学ぶ。これらの評論では、濱田が政府に従ったことには台湾文学の地位を高め、より多くの読者に広める目的があったことが示唆される。以下は文学に対する濱田の考えである。

大東亜戦争下の文学が持つ使命、文学の本質を心から理解した言葉であった。私は大東亜戦下の文学者は幸福であると思つた。確かに、文学が無用の文学であることをやめた時から文学の幸福は初まる。そして大事なことは、有用の文学とは、政治に引きつられる文学ではなく、政治を押しすゝめる文学だ、といふことである。大會の精神は、戦争に便乗することではなかつた。<sup>53</sup>

「大會の印象」は大東亜文学者大会の様子を記録した文章である。この中で濱田は「大東亜戦争下の文学が持つ使命、文学の本質」<sup>54</sup>について語り、日本語普及の問題に触れている。戦時中に文学が国家に貢献することについて、彼は「大東亜戦争下の文学者は幸福であると思つた」<sup>55</sup>と述べ、役に立たない文学という考えをやめたときに文学の幸せがはじまるという意見を示す。彼によれば、「有用の文学とは、政治に引きつられる文学ではなく、政治を押しすゝめる文学だ」<sup>56</sup>という。この記述から、濱田が台湾文学に対して責任感を抱いていたことがわかる。そのうえ、文学者が戦争を機にして文学の本質を理解することが意義のあることだと濱田は述べる。また、前述したように濱田は政治を押し進めて文学を発展させることを求めていた。濱田は戦争を契機に政治を押し進め、文学をもっと多くの人に広めることを望んでいたといえよう。この時期の濱田の文学評論は国策の宣伝になるが、彼の目的は単に国家政策を宣伝することにとどまらず、文学に対する期待も含まれていたのではないか。

次に、「大東亜文學者大會の成果」では「大東亜戦争こそは文学を理解してゐる」<sup>57</sup>と

---

どがある。濱田が台湾で発表した作品の多くは『文芸台湾』と『台湾日日新報』で発表されており、次節ではこの二つの媒体と政府との関係に触れる。

<sup>53</sup> 「大会の印象」 p. 18

<sup>54</sup> 「大会の印象」 p. 18

<sup>55</sup> 「大会の印象」 p. 18

<sup>56</sup> 「大会の印象」 p. 18

<sup>57</sup> 「大東亜文学大会の成果」 p. 64

いう評価がなされ、「文學の正道を確明にした點」<sup>58</sup>が大会の成果であったと示される。そのみならず、濱田は「大東亞文學建設の一要員となつた臺灣の文學に課せられた大きな義務を思ふ」<sup>59</sup>と、大東亞文学建設の中で自己が持つ責務を強調する。以下では、大東亞戦争と文学との関係が述べられる。

大東亞戦争こそは文學を理解してゐる。その要求はいさゝかの無理もなく、よく考へてみれば、ただ文學の正道に還ることを求めてゐるのである。大會の成果を要約すれば、この文學の正道を明確にした點にあつた、と私は思ふ。<sup>60</sup>

この評論で濱田は、大東亞戦争こそが文学がその役割を果たす絶好の機会であると主張し、大東亞文学者大会の開催によって文学の正しい道が明確にされると述べる。ここからは濱田が国策に従う事実があると同時に文学の発展も気にかけていたことがわかる。さらに、濱田は文学に対する自らの責任に言及する。大東亞文学者大会に出席した文学者たちが大東亞文学建設の重要なメンバーであり、台湾文学に責任があると主張し、「大会の印象」と同様、この評論でも大東亞戦争によって文学の本当の姿が見られると語る。

私はひるがへつて臺灣の文學を思ふ。大會に出席した我々四人の責務と共に、この大會によりて、一應形式的には大東亞文學建設の一要員となつた臺灣の文學に課せられた大きな義務を思ふ。<sup>61</sup>

そのうえ、台湾文学は大東亞文学者の批判を受けていたものの、この大会に参加することで台湾文学の目標が定まると濱田は期待する。また、大東亞文学者が大東亞精神を身につけることによって台湾文学がもっと発展できると述べられる。

大會によつて我々の目標は定まつた。確かに従來狭く島内に閉ぢこもつて、全日本文學の一環としての批判の埒外に安住した臺灣文學である。そして

---

<sup>58</sup> 「大東亞文学大会の成果」 p. 64

<sup>59</sup> 「大東亞文学大会の成果」 p. 66

<sup>60</sup> 「大東亞文学大会の成果」 p. 64

<sup>61</sup> 「大東亞文学大会の成果」 p. 66

今や全大東亜文學者の峻嚴な批判の下にある文學である。けれども、その臺灣文學が今次大會の真義を正しく理解する時、目標はあまりにも明確なのである。目標を見定め、文學者の一人一人が自己の内と外に蠢く不純な分子を身を以て排除しつゝ、廣く深い大東亜精神を體得することによつて、誠實な日本人となり切つた時、臺灣文學は撩亂と花咲くであらう。<sup>62</sup>

この評論からは濱田が台湾文学に対して責任を感じていたことがわかる。これは台湾文学が大東亜文学の一環として大きな役割を果たすと濱田が考えていたことの証である。それに加えて、濱田は台湾文学が大東亜精神を体得することでさらに発展できると判断する。

「文化時評」では、大東亜戦争が文学において果たす役割や文学と政治との関係、文芸家協会での「文学報国」の実践について論じられる。文芸家協会の発足後、それまで違う党派に属していた文人が「文学報国」という目的の下で団結した。濱田は会員が組織を活用し、積極的な成果に結びつける実践をするべきであると主張する。

内地の日本文學報國會結成に呼應したかの如く、臺灣文藝家協會が改組して新に積極的活動を目指してゐることは、本島文藝活動の進度を豫想させる點で慶賀に堪へない。改組による組織の新體制は成つた。次に要求されるのはその組織の力を十分に活用しての積極的な仕事の成果でなければならぬ。選ばれた協會員は、さうした努力への義務を正しく遂行せんの決意を新にし、直ちに實踐化すべきであらう。<sup>63</sup>

この評論も文学報国という政策に賛成する立場にある。当時、大東亜文学者大会に参加した濱田は台湾文学が持つ役割を意識しており、台湾の文学者は大東亜文学のために自分の力を尽くすべきであると考えていたといえる。

最後に、「台湾代表的作家の文藝を語る座談会」から、台湾の文芸活動に対する濱田の評価を取りあげ、濱田の台湾文芸活動に対する見解を考察する。この座談会においては、台湾の文化運動と文芸家についての話題に言及される。今後の文芸家協会の活動として

---

<sup>62</sup> 「大東亜文学大会の成果」 p. 66

<sup>63</sup> 「文化時評」 p. 91

「文藝運動を促進すること」<sup>64</sup>の必要を説く濱田は「文化運動は、文化革新運動なのだから、文化を新しく出発するやう要求したい」<sup>65</sup>という要望を語る。そして、戦時下の社会において「文藝は文化運動の中で、非常に高く取扱はれてゐるので、今は實に絶妙の機會」<sup>66</sup>であると指摘する。さらに、濱田は台湾文学の地位に関して「単なる地方文學ではなく、大東亞の文學と云ふ大スケールの中に於ける、臺灣文學といふものが認められる」<sup>67</sup>と述べる。政策を宣伝する目的に利用するために文化活動が重視される当時の社会状況の中で、濱田が台湾文学を重視していたことがわかる。

濱田は台湾や日本で昔は多くの若者が文学に対して情熱を持っていたものの、最近はそのような人が少なくなっていると実感している。だが、当時は日本の文壇でも台湾の文学界でも「報道班從軍」<sup>68</sup>が行われていた。つまり、この時期の台湾文学にも日本文学と同じように大きな役割が課せられており、戦争中文学者が報道班從軍によって政府のために文学を通して国家の宣伝を行うことが望まれていたのである。

濱田 僕達の二十代時代には、文學への熱情を持った若い人が相當に居て、さかんにやつたものですが、最近はさういふ人はあまり見當らない。之は臺灣だけでなく、日本の文學界全般の傾向かとも思はれる。が將來の日本文學のために、由々しき問題でせう。聖戰完遂の國策完遂上、文學に課せられた役割は大きい。中央の活潑な作家群の報道班從軍の事實がこれを如實に物語る。これは臺灣の文學界にもあてはまることである。<sup>69</sup>

濱田は文芸活動を促進するために台湾各地の作家と語りたいと述べる。また、台湾の文化を革新する責任を感じているのは濱田自身だけではなく、政府も相当重視しており、文学が文化運動の中で非常に高く扱われていると述べる。

濱田 先づ文藝活動を促進することを考へてゐます。それから臺灣の作家をもう少し遇したいと思ひますね。今度皇奉に臺灣文化賞といふものが出

<sup>64</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 p. 10

<sup>65</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 p. 11

<sup>66</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 p. 11

<sup>67</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 p. 11

<sup>68</sup> 報道班從軍とは作家が從軍し、戦争の状況を報道することを意味する。

<sup>69</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 p. 10

来ます。その中に臺灣文學賞も含まれるわけです、文化運動は、文化革新運動なのだから、文化を革新すると共に、作家にも新しく出發やう要求したい。[中略]。臺灣の文化を革新促進したいといふ希望は、總督府その他の役所にも多分にあるのです。文藝は文化運動の中で、非常に高く取扱はれてゐるので、今は實に絶妙の機會だと云へませう。<sup>70</sup>

戦時下で台湾文学が大きな役割を果たしていたことが以上の記述からわかる。それは文学者たちが国のために尽力していた一例である。この評論から濱田が「文学報国」に対して賛成する立場にあったことがわかる。それだけでなく、この評論には政府が文化を促進させようとしていたことが指摘される。濱田は当時の政府の方針を理解したうえで、文芸活動を発展させるいい機会だと捉えていたのではないか。

以上のように本節で取りあげた4作品にはいずれも大東亜文学の一環として台湾文学に課せられる役割が大きいという濱田の主張が見られる。濱田は大東亜文学者大会への参加によって台湾文学の目標や役割を把握したと考えられる。これらの評論からわかるのは、濱田が国家政策や大東亜文学者大会を宣伝していたと同時に台湾文学を重視していたことである。大東亜文学大会に出席した後に書かれた以上の4篇の評論では、大東亜文学の下にある台湾文学の役割が語られている。

また、濱田は大政翼賛運動が文化運動に発展の余地を与えることも意識していた。大政翼賛会とは、はじめ軍部を抑えるために作られたものの、結果的に政府の宣伝を行うことになった機関である。この機関によって政府による文化政策が盛んになった。濱田は大政翼賛運動がはじまってから文化の重要性が強調されるようになったと語る<sup>71</sup>。大政翼賛運動が推進されることで、台湾ではそれまで検閲による制限を受けてきた文芸活動が活発になった。大政翼賛運動は近衛内閣組閣後の1940年に展開された<sup>72</sup>。大政翼賛運動の台湾支部機構は皇民奉公会と呼ばれた。皇民奉公会が成立される以前は、台湾総督府の文学や文化運動に対する統制は総督府情報部によって行われていた。盧溝橋事変以降、情報部は文化と文化活動に対して全面的禁圧を行ったが、新内閣が組閣されてから従来の方針を続けるかどうかを検討した。そのため、皇民奉公会が成立するまでの約1年間、台湾の文化

<sup>70</sup> 「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」 pp. 12-13.

<sup>71</sup> 柳「戦争と文壇」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』東京：東方書店、1995年。p. 122

<sup>72</sup> 柳「戦争と文壇」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』東京：東方書店、1995年。p. 117

と文学に対する政策が比較的緩やかな時期があった<sup>73</sup>。このことも台湾文壇に発展の余地を与えた。以下の引用では大政翼賛運動と台湾の文学の活動の復興の関係が説明される。

台湾の文学活動復興に対する影響は、二つの面から説明することができる。第一には、翼賛運動が「高度国防国家」の理念を強調したことにより、統治当局は文化の政治的効果を重視し始め、それによって以前にとっていた抑圧的な文化政策を大きく調整したこと。第二には、「大政翼賛運動会」文化部の「地方文化」と「外地文化」についての提唱で、植民地の文学もそれに関連して重視を受けることになった。翼賛会のいう「地方文化」とは都会以外の地区の文化を指しており、「外地文化」とは日本本土以外の文化のことで、つまり日本の植民地および占領区などの文化を指す。この二つの概念は当時の台湾の文化界においては、ともにかなり重視された<sup>74</sup>

以上からもわかるように、日本の「外地文化」に属する「台湾の文学」は大政翼賛運動の影響で非常に重視されていたと主張する。本論文はこの論点に賛成し、濱田が国策に従った動機は「台湾文学」を発展させるためであったと考える。彼が大東亜文学者大会に積極的に参与したことに同様の目的があったと見られる。このように、濱田は戦時中「文学報国」の政策に従いながらも、台湾文学の発展を重視していた。

濱田は台湾文学は日本文学に属するという前提に基づき、日本文学の中での台湾文学を独自の方向で発展させたいと考えていた。濱田が積極的に国家政策に従って『文芸台湾』に評論を発表し、文学報国の決心を見せたのは前述のとおりである。だが、濱田が政府の方針に従った理由を探ると、濱田の持つ台湾文学の考えは島田謹二の外地文学論に影響を受けたからであることがわかる<sup>75</sup>。松尾（2001）によれば、濱田は島田の論じた外地文学論に共感を抱いていたという。本節では松尾（2001）と同様に、濱田の台湾文学に対する考えが島田の外地文学論に影響を受けたという論点を採用する。

島田（1941年）が提唱する外地文学とは「郷愁の文學・外地景觀描寫の文學・民族生活解釋の文學」<sup>76</sup>の3点を意味する。これに対して松尾は濱田の評論「非文学的な感想」

<sup>73</sup> 柳「戦争と文壇」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』東京：東方書店、1995年。p. 117

<sup>74</sup> 柳「戦争と文壇」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』東京：東方書店、1995年。pp. 117-118.

<sup>75</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文學」2001年。pp.92-93

<sup>76</sup> 島田「台湾の文学的過現末」『文藝台湾』2巻2号。p. 20

を引用し、濱田の台湾文学に対する意見を論じる。濱田は「非文学的な感想」の中で、台湾で発表される作品は台湾の文学であり、日本人にとって珍しくない内容を書くべきではなく、台湾で実際に起こることを描写するべきであると主張する<sup>77</sup>。濱田が日本の政策である「文学報国」に積極的に参与する目的は、日本文学とは異質の、台湾の特色を描いた台湾の文学を作ることである。島田や濱田は台湾文学を日本文学に属する南方文学だと見なしていたため、日本文学にのみ目が向けられた状況から抜け出し、台湾の文学に注目してもらうための努力をした。具体的には、それは大東亜文芸運動や文学報国などの文芸奉公の方針に前向きに参与することであったといえよう。このように、濱田は台湾文学の発展に努めていた。本論文では台湾で起こったことを描写する作品を「台湾文学」と定義し、日本文学とは異なる台湾独自の文学のことだと考える。そして、台湾文学は日本文学の下に属さず、台湾に属する文学である。しかし、濱田が台湾文学の発展に積極的な態度を示すことは、国策に従う前提で台湾文学のことを考慮していたといえよう。この点において、濱田の権力者としての姿勢が示されている。

政府の方針に従った濱田の小説『南方移民村』は台湾文学賞を受賞し、結果として日本の文壇は台湾の文学を認知するようになる。だが、濱田自身は台湾での文学活動を後に振り返り、国策に従う作品を書いたことが恥ずかしいと語っていたことが黄（1996c）によって明らかにされている<sup>78</sup>。そのみならず、濱田の評論では政治と文学との関係が語られる。彼は「有用の文學とは、政治に引きつられる文學ではなく、政治を押しすすめる文學だ」<sup>79</sup>と言い、文学の力で政治を押しすすめる必要があると説く。彼にとって文学の持つ意味は政治を押しすすめることであり、文学が発展するにつれて政治に対して影響を与えるようになることを望んでいる。結果としては台湾の文学が日本の文壇に注目されるようになったが、日本国内の文壇の注目を台湾文学に向けさせるために濱田が国家政策の宣伝を行った事実を考慮すれば、濱田は文学者として政治に押し付けられた部分が多い。このような点において、政府の方針に従うべきか、文学を通して政治を押しすすめるべきかという迷いが濱田の中にあっただのではないか。

以上のように、濱田は台湾文学が日本文学の下に属するという考えで積極的に政府の方

---

<sup>77</sup> 以下はその内容である。「内地人の作家に望み度いことは、もつと台湾的現実に目を開けと云ふことだ。内地人の生活の中には台湾でなければ起こらないやうな沢山の事件がある筈だ。それをほつたらかして内地にだつて珍しくもないことを描くことは止めた方がよい。目的は台湾の文学なんだから」(松尾 2001, p. 89)

<sup>78</sup> 黄「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号（1996年12月）p. 29

<sup>79</sup> 「大会の印象」p. 18

針に従って文芸活動に参加した。濱田の持つ権力者意識は台湾文学に対する積極的な態度から明白である。ただし、本論文では単に濱田の権力者としての姿勢に焦点をあてるだけでなく、権力者として政策に従うべきか、それとも社会主義者として社会の不平を訴えるべきかという葛藤が濱田の中に生じたことを作品を通して明らかにする。また、葛藤が生じたことを明らかにしたうえで、作品に登場する権力者が政府に協力せざるを得ない状況や作品に描かれる権力者と社会の底辺にいる人々との関係を分析する。

## 2.4 メディアと政治

1939年以後、濱田は教職と平行して『台湾日日新報』や『文芸台湾』で作品を発表した。これらの作品は国家政策に従っていたと見なされることが多いが、その背景に台湾文学の地位を高めようとした濱田の意図があったことは前述のとおりである。それに加えて当時の国家による新聞に対する検閲制度の厳しさも考慮に入れる必要があるだろう。本節では台湾の新聞に対する検閲制度と『文芸台湾』や『台湾日日新報』などの報道メディアと政府との関係に着目し、当時の社会において濱田が自らの思想を自由に発表することが困難であったことを示す。

まず、当時の新聞の発行に対する政府の介入を理解するために、新聞に対する制限について説明する<sup>80</sup>。台湾における「新聞紙条例」とは、新聞を発行する際に台湾総督府からの許可を必要とし、さらに新聞社に保証金の支払いを要求する法律である。日本本土で実施されたこの条例は、台湾が日本の植民地となった後の1900年に台湾に持ち込まれる。日本本土では1898年に新聞発行の許可制を廃止し、1909年には申請登録制の「新聞紙法」を制定した。しかし植民地では日本国内と違って、許可制が維持された。

台湾新聞条例によれば、新聞を発行する際に必ず保証金を政府に払わないといけない。しかし、新聞の発行を放棄すれば、保証金が返却される。日本で1909年に制定された新聞紙法に比べると、台湾新聞紙条例には違いが見られる。日本の新聞紙法は許可制ではなく申請登録制を採用していた<sup>81</sup>が、台湾では依然として許可制であったことが示すとおり、台湾の新聞に対する取締りは厳しかった。さらに、台湾では新聞の発行を行う際に高額の保証金を政府に支払う制度を設けた。この保証金は、新聞の発行を停止することで返却さ

<sup>80</sup> 新聞に対する制限と書いたが、実際には雑誌も制限の対象とされた。当時の雑誌と新聞の区別は明確でない。一定の名称を持ち、6ヶ月以内で発行される印刷物は皆「新聞紙」と呼ばれ、雑誌も新聞事業に属していた。

<sup>81</sup> 王『台湾新聞史』台北：亞太圖書、2002年。pp. 79-80

れる。こうして高額な保証金を課すことで経済力のある少数の出版社のみが新聞を発行できる状況を作り出しただけでなく、廃刊時の保証金の返却を約束することで間接的に新聞の発行を継続する意欲を弱めた。政府はこのように新聞の自由を制限した。

1917年に台湾新聞条例が台湾新聞紙令に変更され、その後、台湾での新聞は台湾新聞紙令に基づいて制限されるようになった。同年台湾総督府によって「台湾新聞紙施行日にち」と「台湾新聞紙施行規則」が發布された。それに加えて、台湾での新聞の発行は警察によって制限された。河原（2005）は1931年から37年の間に秩序を混乱させる危険がある出版が一切禁止された状況を説明する<sup>82</sup>。当時は、共産主義、無産主義に関する理論、宣伝もしくは運動が一切禁止されていた。そして、日台融和を阻害する内容や台湾独立を喧伝し、台湾の民族意識を高める事項、台湾総督府を誹謗する内容なども禁止の範囲に含まれた。1937年にはじまった日中戦争以後、政府は世論を強く統制するため「新聞統合政策」を実施し、新聞の統合と雑誌の統合を行った。このように報道メディアに対する制限が強まる中、政府と異なる意見を発表する機会は奪われた。1883年新聞に対する制限がはじまる。とくに、台湾が日本の植民地になった後、1900年から1943年の間に出された法令<sup>83</sup>が示すとおり、台湾の新聞に対する当時の制限は厳しかった。濱田が作品を発表した時代は戦争が激化した時期であり、新聞や出版に対する制限が一層厳しくなっていた。こうした時代背景の下では、濱田が学生時代から持っていた社会主義思想を作品に出せなくなったのも当然のことだといえよう。

次に、雑誌『文芸台湾』と新聞『台湾日日新報』を取りあげ、当時の台湾の社会におけるそれらの位置づけを考察する。結論から言えば、『文芸台湾』と『台湾日日新報』は政府からの経済支援を受けた政府側のメディアである。これらの出版メディアは、経済支援

---

<sup>82</sup> 河原「日本統治期台湾での「検閲」の実態」財団法人交流協会、2005年。pp. 6-8

以下はその内容である（引用元は、鈴木清一郎『台湾出版関係法令積義』）。

(1) 皇室の尊厳を冒瀆する事項(2) 君主制を否認する事項(3) 共産主義、無政府主義等の理論乃至戦略、戦術を宣伝し若しくは其の運動実行を煽動し又は此の種の革命団体を支持する事項(4) 法律、裁判所等国家権力作用の階級性を高調し其の他甚だしく之を曲折する事項(5) 暴力行為、直接行動、大衆暴動等を煽動する事項(6) 植民地の独立運動を煽動する事項(7) 非合法的に議会制度を否認する事項(8) 国軍存立の基礎を動揺せしむる事項(9) 外国の君主、大統領又は帝国に派遣せられたる外国使節の名誉を毀損し之が為国交上重大なる支障を来す事項(10) 軍事外交上重大なる支障を来す事項(11) 犯罪を煽動、若しくは曲庇し又は犯罪人若しくは刑事被告人を賞恤救護する事項(12) 重大犯人の捜査上甚大なる支障を生じ、其の不検挙に依り社会の不安を惹起するが如き事項(13) 財界を攪乱し其の他著しく社会の不安を惹起するが如き事項(14) 戦争挑発の虞ある事項(15) 内台融和を阻害する事項(16) 台湾の独立を慫慂し又は民族意識を唆ること甚だしき事項(17) 台湾総督を誹謗し其の威信を失墜する事項(18) 台湾統治並に施政方針に対し悪宣伝を為し、民度低き島民に疑惑の念を抱かしむる事項(19) 其の他著しく治安を妨害する事項

<sup>83</sup> 王『台湾新聞史』p. 81。詳細は付録①を参照。

を受け続けるために政府に認められる作品を出す必要があった。濱田の作品がしばしば国策に迎合すると見なされるのは、彼が作品を発表した媒体の性質に深く関係している。そこで、これらの雑誌と新聞が成立した背景を取りあげ、なぜ濱田の作品が国策に従ったのかを検討する。

『文芸台湾』に掲載された作品は、多くが台湾総督府の官吏を務めた人間によって書かれている。そのため、この雑誌が政府の方針に従っていたのも想像に難くない。『文芸台湾』は、1940年に台湾文芸家協会によって創刊された<sup>84</sup>。台湾文芸家協会を成立させ、『文芸台湾』を創刊したのは西川満である<sup>85</sup>。台湾文芸家協会とは西川満が日本文学の一環となる南方文学を作るために成立した文芸関連の機構であった<sup>86</sup>。台湾文芸家協会は1941年に文学報国を目的として改組された<sup>87</sup>。改組後の台湾文芸家協会が発行した『文芸台湾』は左翼思想を持つ作家たちにとって脅威であった。なぜなら、『文芸台湾』に寄稿した台湾文芸家協会の会員には台北帝国大学の教授や台湾総督府官吏が多く含まれていたためである<sup>88</sup>。このように作品を発表する作家の多くが政府の人間であったため、『文芸台湾』は政府を支持する立場を取った。濱田隼雄も台湾文芸家協会の一員であり、『文芸台湾』において極めて重要な存在であった。

1941年5月には西川満との中の編集理念の違いのために張文環が『文芸台湾』から抜け、『台湾文学』を創刊した。その後『文芸台湾』と『台湾文学』とは常に対立関係にあった。しかし、1943年11月の台湾文学奉公会の台湾決戦文学会議において、政府はこれら二つの雑誌を両方とも廃刊にした。

一方、雑誌の発行に関しては「日本時代の雑誌の多くは日本人によって発行された。そして、その多くは官方か半官方として発行された」<sup>89</sup>という事実でも示唆するとおり、雑誌の創刊や廃刊を決めることができたのは政府であった。政府が強力に雑誌を統制することによって、民間で発行される雑誌がほとんど存在し得ない状態にあった。

『台湾日日新報』は、台湾総督府の御用新聞であり、もっとも影響力のある新聞であった。王（2002）によれば、『台湾日日新報』が創刊される以前は、台湾における新聞社は

<sup>84</sup> 垂水『台湾の日本語文学：日本統治時代の作家たち』東京：五柳書院、1995年。pp. 17-30

<sup>85</sup> 井出『決戦時期台湾での日本人作家と皇民』台南：台南市立図書館、2001年。pp. 33-34

<sup>86</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における1940年代の濱田文學」2001年。p. 94

<sup>87</sup> 藤井「「大東亜戦争」期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立：皇民化運動から台湾ナショナリズムに至る道」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』東京：東方書店、1995年。p. 86

<sup>88</sup> 河原「中國雑誌解題：『文藝台湾』『アジア経済資料月報』17巻2号（1975年2月）。pp. 3-4

<sup>89</sup> 王『台湾新聞史』台北：亞太圖書、2002年。pp. 113-114。引用文の日本語訳は筆者による。

『台湾新報』と『台湾日報』の2社のみであった<sup>90</sup>。この2社は総督府からの補助額に差があったため、常に対立関係にあった。総督府の新聞に対するコントロールを強めるため、当時の総督である児玉源太郎は創刊者となる守屋善兵衛に協力して2社を買収させた。

1898年5月に『台湾日日新報』が『台湾新報』と『台湾日報』を合併し、台湾総督府にとって重要な言論の道具となった。1900年4月、それまで守屋が独資で経営していた『台湾日日新報』が株式会社になった。そこへ台湾総督府が台湾婦人会の名義で投資を行い、『台湾日日新報』を直接統制するようになった。1902年以後『台湾日日新報』は完全に総督府の御用新聞となり、台湾総督府の言論に沿って新聞が刊行されるようになった。

『台湾日日新報』、『文芸台湾』のような報道メディアと政府との関わりについて解説した。これらのメディアは政府の影響を強く受けた雑誌や新聞であり、その中で作家が政府を批判する意見を述べることは不可能と言ってよい。濱田が自由に政府を批判するような意見を述べることができなかつたのも、上のようなメディアと政府との緊密なつながりが無関係ではない。当時の台湾で政府の方針にそぐわない作品を出版することは極めて難しかった。そういった状況の中で濱田が政府と違う意見を持っていたとしても、以前のように作品に表現することはできなかつただろう。政府のメディアに対する大きな影響力のために、濱田は政府を批判することができなかつたのである。

また、当時、濱田は島田謹二の外地文学論の影響を受けて台湾文学を日本文学の一環として考えた。日本文学に属すると認識される台湾文学を日本本土の文壇に注目させるためには、当時の国家政策を利用しなければならない。戦時中に「文学報国」の政策が出されたことを機に、濱田は政府に台湾の文芸活動を重視させるために国家政策を宣伝する作品を書いた。『文芸台湾』に発表された評論や小説が政府に賛成するよう見えるのは、そのためである。大東亜文学者大会に参加した濱田は戦時中における台湾文学の役割を認識し、『文芸台湾』と『台湾日日新報』などのメディアで台湾文学に対する考えを発表したのである。濱田が『文芸台湾』に発表した政府の方針に対する評価を見ると、彼が日本文学と異なる台湾文学の重要性を積極的に唱道していたことがわかる。

濱田は台湾に来る前に社会運動に関心を持っていたが、台湾に来てからそういった社会への関心が戦時中の台湾総督府による新聞や雑誌に対する統制政策のために抑えられた。なおかつ、濱田が政府に従う作品を発表したのは、日本文学とは異なる台湾独自の文学を広め、その地位を確立するためであった。濱田の台湾における教師体験は作品に反映され

---

<sup>90</sup> 王『台湾新聞史』（タイトルの日本語訳は筆者による）台北：亞太圖書、2002年。pp. 89-91。

ており、彼の随筆や小説に登場する教師の姿には濱田の教育に対する考えや生徒に対する思いやりが表れている。第3章では濱田の作品の分析を通して、その中に見られる権力者の立場の変化、そして権力者の社会的弱者に対する責任を考察する。さらに、濱田の作品から政治に言及している内容を掘り起こし、彼の政府の政策に対する考えを解明する。

### 第3章 作品における教師

第2章で論じたとおり、濱田が台湾で作品を発表した当時は政府とメディアの密接な結びつきや厳しい検閲制度のために個人が直接的な政府批判を行うのはほぼ不可能な状況であった。その中で彼は、政府や社会的弱者に対する彼の考えを以前の社会主義的な評論とは異なる形でしか表現できなかった。濱田は台湾文学の地位を高めるという理想のために、大政翼賛運動などの新体制や戦時下における政府の宣伝政策を利用し、政府側に付いて作品を発表した。このような事情のために濱田が台湾で発表した作品には直接的に政府を批判し、非難する記述は見られない。だが、彼の作品には政策に対する発言は存在し、台湾人や湾生のような当時の台湾において弱い立場に置かれた人々に対する思いやりが窺える。本章では濱田の作品の中で教師と関わる小説や随筆の分析を行い、濱田の作品に描かれる権力者と社会的弱者との関係、ならびにその中で教師が抱く葛藤を明らかにする。ここで分析する作品のうち「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」は『台湾日日新報』に、「病牀日記」と「横丁之圖」は『文芸台湾』に発表された。そのほか、「行道」は『台湾時報』、「蝙蝠（ぺんしい）」は『台湾文学集』に掲載された作品である。「地球儀」と「煙草」は濱田が日本に戻った後に書いた作品である。

本論文で取りあげる作品は2種類に大別される。一つは、権力者が自分の意思で権力を持つようになったのではないということを語る作品である。もう一つは、日本の敗戦を境とする権力者の地位の変化を描き、権力が必ずしも不変ではないということを語る作品である。本論文で取りあげる7篇における権力者とは日本人の教師を指す。そして、社会的に弱い立場にある人々は、日本人の湾生と台湾人の生徒、そして敗戦後日本に戻った後の日本人教師を指す。本章ではまず各作品のあらすじを紹介し、作中の教師と関係する部分を引用する。そして、国家政策の枠内に置かれる教師の葛藤について考察し、教師が敗戦前とその後で社会的地位が変化したことを示す。それとともに国家の政策に従うことと社会主義者として社会的弱者に対する責任を感じることとの間に生じた濱田の葛藤を明らかにする。

#### 3.1 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」<sup>91</sup>

「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」は1940年に『台湾日日新報』に発表さ

<sup>91</sup> この作品は『台湾日日新報』1940年1月23日、および1940年1月24日に掲載された。

れた作品である。この作品の主人公である森岡八千代は濱田の教え子である。彼女は「**危険で困難な宣撫の仕事に當つて居られる夫君の傍を、いつかな離れず**」<sup>92</sup>台湾から広東に渡り、夫と正月を過ごす。そして、広東で匪賊に襲われて死ぬ。濱田は八千代の母親から彼女の死を知る。作中では濱田が八千代の学生時代を回想し、彼女の死が持つ意味を語る。

作中で「**新莊で国語講習所の先生をしてゐた経験があるので、自ら進んで士民に日本語を教へたりして、夫君の仕事を助け、凜々しい働きをしてゐた**」<sup>93</sup>と述べられるとおり、八千代は国語教師である。彼女は広東に渡った後も国語を教えている。そして彼女は、時には危険な場所へ「**慰問にでかけてゆくこともあつた**」<sup>94</sup>。このような八千代は兵隊でなくても「**裏として立派な働きをし、軍人に劣らぬ美しい死を遂げた**」<sup>95</sup>と描かれる。

このような内容の作品は通常国策を宣伝したものであると判断される。この作品からは、当時の教師は生徒の指導だけでなく、国家のために自分の利益を犠牲にして尽力することが望まれていたことがわかる。作中の八千代は国語を教えるほかに、戦争中、軍隊に行つて慰問の仕事をした。戦時下の社会背景を考慮すれば、戦争が激化した時期に八千代が大日本帝国の一員として夫と一緒に戦地に慰問に行ったのは、政府のために力を尽くしたいと考えたからではないか。八千代は国語講習所で国語を教える教師の身分でありながら、国のために働き、匪賊に遭つて命を落とした。彼女の死は軍人の名誉ある死のように美しいものとして描かれる。

作中の八千代はかつて濱田の教え子であった。前述のように濱田は教員として台湾で働き、高等女学校に勤務した経験を持つ。当時の女学校教育の経緯を見ると、「台湾教育令」<sup>96</sup>が發布された後、高等女学校に師範科が設けられている。そのため、八千代は女学校で師範科の授業を受けることによって教員としての役割を担うようになったと見られる。戦争中、教師は国家の強い側面のみを生徒に教えることが求められた。学校で教師が生徒に伝える思想は、教師が師範教育課程において学ぶ内容と深く関係している。師範教育課程で教えられる内容は政府から与えられたものであり、これによって教師は国家からの影響を強く受け、政府の立場に置かれるようになる。それは必ずしも教師自身が自主的に選んだ結果とは言いがたい。そこで以下では、植民地台湾の教育史を踏まえ、当時行われた師範教育の内容を確認する。

<sup>92</sup> 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」1940年1月24日。

<sup>93</sup> 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」1940年1月24日。

<sup>94</sup> 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」1940年1月24日。

<sup>95</sup> 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」1940年1月24日。

<sup>96</sup> 台湾教育令は1919年1月4日勅令第1号によって制定された。台湾教育令の詳細は付録②を参照。

鍾（1993）によれば、日本では1886年に森有礼の教育改革によって国家主義が確立された<sup>97</sup>。このことは師範教育に反映され、師範生に対して順良、親愛、威重を重視する教育とともに全学校宿舎を実施し、国家主義精神のある教師を養成していた。台湾では1899年に師範学校が設立された。このことが示すとおり、日本は植民地における教育を重視していた。このことは、台湾総督府の初代学務長である伊沢修二が出した教育方針にある「国語学校」に師範部が存在していたことからわかる。伊沢は教育の進むべき方針を緊急事業と永久事業に分けていたという<sup>98</sup>。その一つは講習員養成であり、もう一つは日本語伝習である。講習員養成は、さらに教員養成と新領土官吏養成に分かれており、教員養成のために「国語学校」および「師範学校」が設けられていた。国語学校は日本人教師を養成するため、師範学校は台湾人教師を養成するための施設であった。

1910年、国語学校に師範部が加えられた。師範部には小学校師範部と公学校師範部に分かれている。そして、それまで国語学校に属していた師範部を師範部甲科と称し、新たに台湾人教員を養成するための師範部乙科を設置した<sup>99</sup>。伊沢の講習員養成の方針に基づいて師範部が設立されたことから、植民地台湾では師範教育が重視されていたことがわかる。当初、師範部には台湾人が含まれていなかったが、1910年には日本人が勉強する師範部と台湾人が勉強する師範部が作られた。このことが示すとおり、台湾人と日本人は平等に教育を受けていたわけではないものの、台湾を同化するために日本語が重要な道具とされ、教育政策は同化政策に沿って展開されたことがわかる。

なぜ国語科目が重視されるようになったかを知るためには、まず「国語」という概念の持つ意味を検討しなければならない。イ（1996）は国語と日本精神との関係を究明し、「国語」の持つ意味を明らかにしている。「国語」と「国家」との関係を論述した人物の一人に上田萬年がいる。上田は「国語」と「国家」との有機的結びつきを普遍的に妥当するものとして定立したうえで、「日本」の独自性・固有性<sup>100</sup>を説いた。イ（1996）によれば、上田が「国語」と「国家」との関係についての論文を発表した意図は、「あるべき国家の理想像をえがきだし、そのうえで「日本」がいかにその理想像に近いかを説得する」<sup>101</sup>ことであった。「日本語は日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の国体は、この精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はこの最もつき最も永く保存せらる

<sup>97</sup> 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993年。p. 225

<sup>98</sup> 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993年。p. 99

<sup>99</sup> 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993年。p. 122

<sup>100</sup> イ『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。p. 119

<sup>101</sup> イ『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。p. 120

べき鎖の為に散乱せざるなり。」<sup>102</sup>という上田（1968）の言葉は、日本の「国語」イデオロギーの特徴を最も顕著に表現している。つまり、日本語が日本人の精神的な血液となり、日本の国体はその精神的血液に支えられるという見方である。このような観念は同化政策に影響し、植民地での教育政策にも影響を与えた。そして、日本から植民地に來た教師が「国語」を教える際、このような日本語に対する概念が教育に反映されていたといえよう。イ（1996）によれば、上田は国語を日本国内だけでなくアジア全体にも広めようという野心を持っていた。このことは、以下の上田の言葉からもわかる。

国語といふ考は、統一せられた国家と相関聯するものであり、国民の精神は国語の統一によって結付けられ、国家の組織は之によつて鞏固にせられるのであるから、国語はその国家を形成する国民の中枢たる民族の言語であり、全国民に対して統一的勢力を有する言葉で無ければならぬ。<sup>103</sup>

上田は「国語とは一の国家に属する人民の用いる言語である」<sup>104</sup>と定義していたが、日本は台湾、朝鮮などの植民地を手に入れたので、当初の「国語」に対する定義が不十分になった。そこで、上田は「我が大和民族は過去に於て、国民の中枢となり、他の異種異族を同化して今日の国家を維持して來た。将来に於ても亦、さうなければならぬと思ふ」<sup>105</sup>と「国語」を再定義した。植民地においては異民族を同化させ、異民族に「国語」を勉強させるべきだという考えが反映されている。上田は「国語」を日本人の精神的な血液と見なし、日本の独自性を強調し、日本の言葉をアジア全体に広め、日本語を通して異民族を同化することを重要視した。このような考えが植民地での国語教育にもたらした影響は大きい。

「国語」を勉強することが国民性の涵養であると見なされ、国語教育は特に重視された<sup>106</sup>。そのため、台湾で最初の教育事業においては、日本語を教えて順良なる日本国民にすることが一貫した目標であった<sup>107</sup>。台湾での各段階の師範教育教科目のカリキュラム

<sup>102</sup> 上田「国語と国家と」東京：筑摩書房、1968年。p. 44。

<sup>103</sup> イ『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。pp. 156-157

<sup>104</sup> イ『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。p. 156

<sup>105</sup> イ『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。p. 156

<sup>106</sup> 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993年。p. 91

<sup>107</sup> 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993年。p. 99

108からも、初期の教育方針から 1940 年代以降戦争のために作った教育政策まで一貫して「国語」という科目が重視されていたことがわかる。台湾の公学校師範部乙科の日本語時間数は 32 時間であった<sup>109</sup>。それはすべての科目の授業時間数の中で最も多い。台湾公学校師範部演習科においても日本語＝国語の授業時間数が一番多い<sup>110</sup>。このように、公師範部では日本語の教育が重視されていた。

「国語」は大日本帝国にとって日本国民の精神を養う有利な道具であった。また、国語が日本の精神や血液であるという上田（1968）の論点は植民地台湾の教育においても通用していた。つまり、台湾での教育において国語の科目が非常に重視されたのは、国語を通して生徒を忠良なる国民に育てるためであった。そのうえ、植民地台湾における師範教育でも国語という科目が重視される。師範学校教育を受ける生徒は国語を勉強することによって日本精神が身につくと見なされ、大日本帝国を愛する感情や日本に対する誇りも現れると考えられた。このような教育システムの下を卒業した教員の卵が教員になり、学校で自分の学んだことをさらに生徒に教える。要するに、師範学校で「国語」の科目を受け、日本に対する愛情を教えられた教師たちが生徒に国語を教えることによって同じ価値観が再生産されるのである。

八千代のように師範学校を卒業した教員の台湾での地位は比較的高い。だが、その地位は国家政策の枠内で与えられたものに過ぎない。当時の教員は師範教育を受け、自らの学んだことを生徒に伝えることを強く求められた。「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」においては国のために戦地に赴いて宣撫や国語教育を行い、その地で死んだ八千代が美しい死を遂げたと描かれるものの、それは八千代の自由な意思ではなく、彼女は国家によって危険な場所に行くことを強いられたのではないか。国の作った教育システムの下で教育され、師範学校で国を愛する意識を植えつけられた彼女は、その意識を生徒に伝達するために利用されたのである。

八千代が国語を教えた「国語講習所」は社会教育の範囲に入る。「国語講習所」とは学校教育を受けていない人たちが国語を学ぶ場所であり、1921 年に設立された。特に 1937 年以降戦争が激しくなった時期に、日本が忠誠な皇民を養成するために「国語講習所」の役割が重要となった。「国語講習所」では子どもから老人までが国語を勉強している。学校教育を受けていない多くの人が「国語講習所」を通して国語を勉強する機会を与えられ

108 台湾の師範教育科目および授業数については付録③と④を参照。

109 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993 年。pp. 125-127

110 鍾『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版、1993 年。pp. 125-126

た。国語が重視された理由は、前述したように日本国民としての精神を養うためである。

師範教育のシステムの下で教育を受けた国語教師である八千代は、当然国語教育や修身などの国民の精神を養成するような科目を受けている。その教育を通して彼女の中に日本に対する忠誠心が生じることもあるだろう。国語教育は日本を愛する感情を養う手段であった。ほかにも同様の政策はあったものの、日本が台湾を統治して以来、国語教育がずっと重視されてきたことから当時の国語教育の持っていた影響力は大きかったと考えられる。こうして、日本に対する忠誠心が教育によってインプットされ、国のために自分の命を犠牲にすることさえも正しいことであると信じ込まされるのかもしれない。そのため、彼女は台湾を離れて広東に行き、そこで宣撫の仕事をし、命を落とした。

この随筆の中で、濱田は自分の教え子である八千代の死を「美しい死を遂げた」<sup>111</sup>と評価する。濱田が自分の生徒の死を例にして大日本帝国のために自らを犠牲にすることを名誉あることとして描いたのは国家の政策を宣伝するためである。しかし、当時の師範学校教育を見ると、一人の教員として国の政策の枠内に置かれて国家の教育システムの中で教育された彼女は、結局自分の故郷から離れて国のために自己を犠牲にしたのではないか。

台湾で教師として生徒を教える際、濱田は国の方針に従わなければならなかった。国家の政策に従って八千代に教育を施し、国家の方針を八千代に伝えた。濱田がこうした背景で生徒を教育し、その生徒が学校で学んだ価値観に基づいてさらに生徒を教育する。濱田は戦時中国家に雇われ、台湾で教員として働いたため、国家の方針に従わねばならなかった。当時の教員の役目は、国家が作り出した価値観を生徒に教えることであったといえよう。こうした役割を果たすために、濱田はその価値観を内面化しなければならなかった。こうした状況下で濱田は実際に国家政策の方針に従って生徒を指導した。そういった意味で、濱田は国策に従う立場に置かれていたのである。たとえ濱田が教育の理念を果たしたかったとしても、日本を愛し、日本のために自らを犠牲にする価値観に基づいて教えねばならなかった。教員として単に日本を愛する価値観を生徒に教えるだけでなく、自らが国のためにすすんで犠牲になることも求められた。戦時中の台湾で教員が置かれたこのような立場がこの随筆には描かれている。

この随筆からは濱田の権力者としての立場が明確に見られる。だが、そのような濱田も国策の枠内に置かれ、国家教育の方針に迎合するしかない。彼は社会主義思想を持っていたが、台湾に来てからは教師という権力者側の仕事をしている。そんな中で濱田が書いた

---

<sup>111</sup> 「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」 1940年1月24日。

随筆は国策に従っているように見える。しかし当時の台湾の教育システムでは、濱田は国家が作る方針で生徒を指導しなければならない立場に置かれ、国家の味方になるしかなかった。社会主義思想を持っていたとしても彼は権力者側の教師として働いているので、国策に従うしかない。そのため、濱田の権力者としての立場と国策の枠内に置かれた立場との間に葛藤が生じたといえるのではないか。

### 3.2 「病牀日記」

「病牀日記」は1940年に『文芸台湾』に発表された。この作品は入院中の女子学生である主人公が、周囲の人間を観察して書いた日記の形式をとる。湾生<sup>112</sup>である主人公は台湾を愛することで日本への郷愁が癒される。本論文は主人公の女子学生「あたし」と彼女の女学校での教師であるM先生に関する箇所を取りあげ、考察を行う。作中にはM先生が「あたし」の入院するところへお見舞いに来る場面がある。M先生はどのような先生なのかを「あたし」は次のように描写する。

あたしがまちがつたことを云ふと、短い言葉で、遠慮なくやつゝける。時には癪にさはつて何とか反抗してみようと思ふけれども、どうしてもできない。安心してものが云へるのは臺北で先生一人だ。あたしの家の事情もいつの間にかちやんと知つてる。のんきさうでゐて、こまかい注意が行き届いてゐる。<sup>113</sup>

「あたし」が「まちがつたこと」を言うと厳しく訂正する一方、「あたし」の見舞いに訪れて彼女の生活に関心を示すM先生は、「あたし」にとって唯一「安心してものが云へる」人物である。彼女にとってM先生は自分に関心を示し、何かあったらすぐ気づいてくれる教師である。そればかりでなく、M先生も「あたし」の事情をよく理解している。その先生が台湾で教師として湾生である彼女に接する。日本植民地時代においては、教師は官吏の地位にあり、社会的に強い存在だと見なされている。台湾教育会（1939）に掲載されている日本植民地時代の教師の官制によれば、公学校の教諭は判任として生徒の教授を担当し、小学校の教諭は判任として児童の教育を担当する。それだけでなく、高等女学校の教諭は判任として生徒の教育を担当するという<sup>114</sup>。「あたし」も台湾で生活をしているが、他の日本人と同じ権力を持っているわけではない。むしろ社会的地位が弱いよう

<sup>112</sup> 湾生とは台湾生まれ、台湾育ちの日本人を意味する。

<sup>113</sup> 「病牀日記」 p. 7

<sup>114</sup> 教師の官制に関しては付録の⑤⑥⑦を参照。

に見える。そのような「あたし」は自分自身のアイデンティティに対する迷いを感じる。この迷いが顕著に表れるのが、灣生のインテリと結婚したら自分の子どもの故郷がどこになるのかわからないと語る以下の部分である。

恐しいのは、あたしの故郷の影がうすくなつたといふことばかりではない。  
灣生のあたしが灣生の男と結婚する、そして出来た子供の故郷は、といふ  
ことだ。<sup>115</sup>

「あたし」のお見舞いに来た男について隣にいる人と話すとき、「あたし」は不機嫌になる。お見舞いに来てくれた男が帰った後、隣のマダムが彼女に「[男は]あなたが好きなんでせう」<sup>116</sup>と言い、それに対して「あたし」は「あんなのそこらにざらにある灣生インテリよ。見識ばかり高くて、信念のない男は嫌ひよ」<sup>117</sup>と言り返す。「あたし」自身も灣生であるが、そのような「灣生インテリ」が嫌いだと言うとマダムから「あんたはまた理想の高い、女らしくない人だ。お嫁にいつたら困りますよ」<sup>118</sup>と言われる。「あたし」が「灣生インテリ」を嫌う理由は、同じ灣生と結婚したら、ますます日本という故郷から遠く離れるような気がすると考えているからである。病気で入院したことで、「あたし」自身の灣生としての意識が芽生える。しかも、故郷のない寂しさは台北を愛することによって治すことができると「あたし」は信じている。

あたしは今日程自分の灣生を意識したことはない。肺が悪くなつてみると  
診断された時のやうな感じがする。

しかし、病氣は身體を愛したはることによつて治せる。故郷のない淋  
しさも亦、臺北を、臺灣を愛することによつて治せるだらう。<sup>119</sup>

マダムとの会話が終わった後、「あたし」はM先生がお見舞いに来た際に愚痴をこぼす。すると、M先生は彼女に「どうも君は人が悪くなつたな」<sup>120</sup>と言う。さらに、M先生は以下のように彼女を諭す。

---

<sup>115</sup> 「病牀日記」 p. 15

<sup>116</sup> 「病牀日記」 p. 7

<sup>117</sup> 「病牀日記」 p. 7

<sup>118</sup> 「病牀日記」 p. 7

<sup>119</sup> 「病牀日記」 p. 15

<sup>120</sup> 「病牀日記」 p. 8

先生はよく「自分の周囲を批判し給へ」とあたしに聞かして下さった。そして、「批判しながら自分を高めるのだ、本當に人間を尊敬することを知るためには、人を輕蔑することも知らなくちゃいかん」とも云はれた。あたしはまだ尊敬すべき人をみつけないだけだ。何でも彼でも輕蔑だけすることの、まちがってゐることは知つてゐるつもりだ。<sup>121</sup>

「灣生インテリ」を嫌う「あたし」は、自分の灣生としてのアイデンティティが甦った。「あたし」は後に M 先生の「批判しながら自分を高めるのだ、本當に人間を尊敬することを知るためには、人を輕蔑することも知らなくちゃいかん」という言葉を思い出す。「あたし」は先生の言ったことに影響を受け、「灣生インテリ」を輕蔑する自分が間違っていたことに気づく。最後に「故郷のない淋しさも亦、臺北を、臺灣を愛することによつて治せるだらう」<sup>122</sup>と思えるようになったのは、M 先生のおかげであろう。

灣生である「あたし」にとって、日本は行ったことがあるだけで住んだ経験のない場所である。日本で暮らしたことがないのに故郷が日本にあるという思いが、彼女のアイデンティティの混乱を引き起こしている。日本人としてのアイデンティティを持つとしても台湾で生活をせざるを得ない事情にあり、彼女のアイデンティティに対する迷いは一層高められる。そのため、彼女は入院した際にお見舞いに来てくれた灣生のインテリに嫌な気持ちを感じ、隣のマダムに故郷がどこにあるのかと聞かれたときに戸惑いをおぼえる。

しかし、悩みの中で彼女は M 先生の言葉を思い出す。このように、「あたし」が M 先生から受けている影響は大きい。マダムとの会話の後に「あたし」が先生の言葉を思い出すのは、M 先生の生き方を認めたくて先生の考えに共感を抱き、一番の理解者だと考えているからなのではないか。作中で M 先生は権力を持つ存在であり、彼の影響力は大きい。その影響力によって灣生の「あたし」は自らのアイデンティティを考えるようになった。その結果、「あたし」は台湾を愛することで故郷に対する迷いがなくなるという結論を出す。

灣生という身分のため、「私」は日本統治下の台湾で生活していても日本人と同じ扱いは受けられない。本来は植民者と被植民者との間に緊張関係が生じるが、この作品においては植民者の中でも弱い立場にある灣生が「故郷のない淋しさも亦、臺北を、臺灣を愛す

---

<sup>121</sup> 「病牀日記」 p. 8

<sup>122</sup> 「病牀日記」 p. 15

ること」<sup>123</sup>を通して寂しさを癒す。そのみならず、この作品では弱い立場にある学校の生徒が強い立場にある女学校の教員の影響を受け、湾生としての意識を持つようになった。それは社会的に強い人が弱者に対して何か直接的な援助をするのではなく、間接的に弱い立場の味方になった具体的な例だといえるのではないか。湾生は日本人であっても、日本人の植民者とは異なり、権力を握っているわけではない。湾生が置かれた立場は弱いものである。それに対して、権力側に立っているともいえる女学校の教師が湾生に影響を与えた。その影響を受けた「私」が自分のアイデンティティの迷いから抜け出すことができ、「臺灣を愛する」気持ちを抱くようになった。

この作品では湾生の生徒が教師の言葉に影響を受ける。そのみならず、湾生の「私」のアイデンティティに対する迷いが「臺灣を愛すること」で解決されると見なされる。それは濱田が湾生のように弱い立場にある人たちのために作品を通して発言している明らかな証といえるのではないか。湾生は台湾人のように日本に統治される立場に置かれていないにもかかわらず、日本人とも待遇が異なる。湾生がそういった迷いから抜け出す方法は、台湾を愛することであるとこの作品は語る。湾生が「臺灣を愛すること」によって自分の心にある寂しさが癒される姿がこの作品には描かれる。

濱田はこの作品を通して、自分の故郷がどこにあるのかという湾生のアイデンティティに対する葛藤を語るだけでなく、権力の持つ人々は弱い人に対して社会的に大きな影響力があるということも示す。弱者に対する影響力があることから、権力者は社会的弱者に対して彼らのアイデンティティを思い出させる必要があると濱田は考えている。濱田のこうした考えから、彼が権力者として社会的弱者に対する責任を感じていたことがわかる。そういった考えが弱い立場にある人々を見下す考えでもあることを見逃してはならない。このように濱田は権力者として社会的に弱い人々のために何かをやろうとする気持ちを持っていたものの、逆に社会的弱者に対してやむを得ない差別が生じたといえよう。

「病牀日記」は「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」に比べると、権力者が権力者にならざるを得ない状況にあまり言及されていないが、権力者が弱い立場にある人々に大きな影響を与えることが示されている。このことから、台湾と日本との間に生じる上下関係や不平等な関係が「臺灣を愛する」ことによってなくなることを願う濱田の気持ちが現れているといえるのではないか。濱田は当時自分の意志で自分の考えをそのまま作品に出すことができないが、この作品では濱田が現実的に権力者として弱い立場にある人々

---

<sup>123</sup> 「病牀日記」 p. 15

との間の関係のあり方を模索していたことが窺える。

この作品では、権力者の持つ責任が語られる。作中の権力者は社会的地位の低い湾生に影響を与え、彼女自身のアイデンティティに目を向けさせた。そういった影響で湾生のような社会的に弱い人々が台湾で生活を送れるようにした。ただ単に植民者と被植民者との間の関係を語るだけでなく、本作は権力者が社会に対して持つ責任を示しているのであろう。作中の M 先生は植民者／権力者である。彼が社会的弱者に対して与える影響には、差別意識がないとは限らない。彼が権力者として社会的弱者に対して責任を感じる時、そこには相手を見下す視線が存在し、湾生の少女に対する差別が無意識のうちに生まれる可能性がある。だが、「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」においても述べられるとおり、作品の教師は自ら望んで権力者になったわけではない。そもそも、自らの権力を意識することもないだろう。権力者は今まで生きてきた国家に対する価値観に基づいて、他者＝自分より弱い立場に置かれる人々に対する責任感を抱くものの、結局他者に対する差別が生じる状況もあるのではないか。この点において濱田の作品には社会的弱者を心配する様子が見られるが、実際には濱田が権力者として他者に対する差別を行っているといえよう。以上のように、作中の権力者の教師には結局、社会的弱者を見下すまなざしが感じられる。

濱田は日本人教師という権力者になり、国家の方針を宣伝する立場に置かれて作品を書いた。だが、作品には彼の社会主義的な思想が反映されていることを無視することはできない。つまり、作品では統治者としてどのように台湾という植民地で生きていくのが語られるが、同時に社会的に弱い立場にある湾生に対しての気遣いが見られる。この作品では濱田の国策への追従が見られる一方、彼が社会的弱者に対して責任を感じていたことがわかる。そのため、権力者の立場と社会主義的な思想の立場との間に葛藤が生じているといえるのではないか。

### 3.3 「横丁之圖」

「横丁之圖」は 1940 年に濱田が『文芸台湾』に発表した作品である。「横丁之圖」は発表時に大きな反響を呼んだ。なぜなら、濱田が作品に描いた人物があまりにも現実のようであったので、作品が発表された後に濱田の作家としての倫理が問題とされたのである。「横丁之圖」を読んだ多くの読者は小説に描かれる人物が実在の人だと信じ込み、そのようなデマも出た。そのデマが近所の人に迷惑をかけることを気にした濱田は、『台湾日日

新報』で随筆「横丁の人々」を發表し、小説に登場した人物が存在していないと釈明した。

「横丁の人々」では「リアリズムの精神といふものが豫想外に誤解されてゐるもんだなと淋しく思ひ乍らこんな雑文を書く氣になつた所以である。」<sup>124</sup>と述べられる。濱田が率先して写実的な文学を書くことにしたのは、台湾での文学が写実主義の手法に対してまだまだ成長の余地があると思われていたためである。だが、リアリズムの手法を作品に取り入れると、やはり現実のことを書いたように誤解された。「横丁の人々」ではこのことに関して以下のように述べられる。

僕はもちろん、文學上のリアリズムを追究してゐる。だから、出来上つた作品が、まことしやかなものになるのは當然だし、又、さうならなければならぬ、といふことはいへる。大體、この島ではリアリズムの文學がなかゝ成長しないと考へられてゐるが、はたしてさうなのであらうか、それを他人がやつてみなければ自分が實驗してみよう、といふ意氣ごみで作上げたのである。[中略]リアリズムの精神といふものが豫想外に誤解されてゐるもんだなと淋しく思ひ乍らこんな雑文を書く氣になつた所以である。

125

濱田にとってリアリズムとは実在する人物を描写することではなく、実際の状況を描こうとすることであつた。そのため、「横丁之圖」を書いた際に題材としたのは、濱田の目に映つた実際の社会の状況ではなかつただろうか。濱田が台湾の文学には写実手法に対する認識が本当に足りないのかを確かめるため、「横丁之圖」を書いた。だが同時に、台湾の状況を「横丁之圖」を通じて読者に伝えようとする意図があつたのではないか。作中にある人物が本当に実在するか否かを探究するよりも、作品に描かれた台湾の社会の状況にもっと注目してほしいと濱田は思っていたのではないか。

いかにも、作中に出てくるやうな犬もあれば、門もある、が、それは眞實らしさを上げるための道具たてで、門の中に住んでゐる人々は、決して實はしない。

<sup>124</sup> 「横丁の人々」1940年10月13日。

<sup>125</sup> 「横丁の人々」1940年10月13日。

あのままの人はみないにしてもモデルはあるんだらうと簡単に考へて  
貰つてもこまる。偉さうに云つてしまへば、モデルは臺灣中からとつてき  
たのである。<sup>126</sup>

以上の引用が示すように、濱田は現実にある建物や動物をそのまま作品に入れたにもか  
かわらず、作品に登場した人物はあくまでも虚構のものである。濱田が重視したのは社会  
に起きた状況を作品に入れることであった。濱田の観察に基づく社会の状況や動きが述べ  
られることこそが、彼の持つ写実主義であったといえよう。だが、第2章で述べたような  
事情のために濱田はこの作品においても国策に従った。作品の内容は濱田の身の周りに起  
こった出来事が中心である。本論文では、作中に登場する女学校教師と教え子との会話に  
注目し、それを分析することによって濱田の持つ考えを解明する。

濱田が「横丁之圖」を擁護して随筆「横丁の人々」を発表したことは上でも述べた。「横  
丁之圖」に対しては、龍瑛宗も『文芸台湾』に評論を発表した。龍（1940）は濱田の作  
品に現れる写実的手法に関して以下のように述べる。

リヤリズムといふものは多分に内省的な性格をもつてゐるものである。内  
省的な性格を支へてゐるのは、作家の知性であつて、知性が崩れた場合、  
作品は概ね平板な風俗小説に陥つてしまふ。リヤリズムで構成された「横  
丁之圖」から退屈と無味乾燥を感じさせないのは知性である。<sup>127</sup>

以上のように、「横丁之圖」で用いられる写実的な手法が読者の興味をひきつけるのは  
作者の知性のおかげであると龍は示す。龍は濱田のリアリズムの手法に高い評価を与えた。  
さらに龍は濱田の写実的な描写の手法と西川満のロマンチズムは台湾文学の未来を開  
く二流派であると述べ、以下のように評価する。

しかしながら、臺灣においてはこの種のリヤリズムの發生こそこのましい  
ことで、「横丁之圖」はその意味で僕は高い価値をみとめるものである。

おそらく、濱田隼雄氏のリヤリズムと西川満氏のロマンチズムは臺灣

<sup>126</sup> 「横丁の人々」1940年10月13日。

<sup>127</sup> 龍 「文芸評論」『文芸台湾』1巻6号。p. 494

文学の未来を傾向する二流派で、夫々の異つた道から臺灣を文学してゆく  
ことであらう。<sup>128</sup>

濱田は台湾の状況を写実的な手法で作品に反映し、濱田自身の持つ考えも写実的な描写の仕方によって作品に表現していると考えられる。

作品の分析を行う前に、「横丁之圖」のあらすじを整理する。「横丁之圖」は前後編を通じて老官員、出世と恋愛を天秤にかける本島人など多様な人物が描かれる。本論文は前編に登場する教員とかつての教え子である公学校教員に焦点を絞り、考察を行う。

「女の先生があるんだらう。その連中とはどうなんだい。」

「本島人の先生が三人と、内地人が二人ゐますけれど、一人は校長先生の奥さんです。も一人は三人の子持です。」(中略)

「先づ女だけでいゝ、本島人の女の先生に、君は近づかうとしたかい。積極的にだ。」

「なかなか近寄れないんです。」(中略)

「連中は、内地人をけむたがつてゐる反面、近づきたくもあるぢやないかね。三人のうち一人はできさうなもんだな。教育者も、教育者である前に人間なんだ。君はさうすることによつて、一人でも人間らしい教育者を作ることになる。立派なことぢやないか。」<sup>129</sup>

女学校教師のかつての生徒である女性教員は公学校に勤務している。公学校で彼女は国籍が異なる同僚に対して自らの教育理念を語る。しかし、教育者としてまずは本島人(台湾人)に自分の教育理念を伝えるべきだと二人は考えている。そして、二人は三人の本島人教員を「人間らしい教育者」にすることを立派なこととして語る。上の引用部分では社会的に上の地位に置かれている日本人は台湾人を教化するべきだという考えが見られる。これは日本と台湾の間の権力関係を明確に示すものである。その権力関係とは植民者が上の立場に立っており、台湾人を教化するというものである。

この作品にはただ単に国家の政策や方針を宣伝するにとどまらず、台湾での公学校教育には賛成できない濱田の考えも見える。「本島人を信用できなくちゃ」<sup>130</sup>という作中の言葉は、台湾を単純に植民地の一つとして見なしていたのであれば表れるはずがない。濱田

<sup>128</sup> 龍 「文芸評論」『文芸台湾』1巻6号。p. 495

<sup>129</sup> 「横丁之圖」 p. 34

<sup>130</sup> 「横丁之圖」 p. 31

は写実的な手法を用いて台湾で起こっている状況を作品に表現しており、公学校教育に関する彼の意見も作品に描かれている。以下の引用は、当時の公学校教育に対する濱田の意見が最も顕著に表れている部分である。公学校で教師として働いているかつての教え子が持つ教育理念とは「本島人の生徒を信用できなくちや」<sup>131</sup>というものである。彼女とその女学校の先生は、現行の公学校の教育には問題があり、新しい教育方針をもたなければいけないという理念を持っていることがわかる。

本島人の生徒を信用できなくちや、公学校の教育は正しくもないし、新しくもならないつて、先生が云はれたことを思ひ出しながら、自分としては一生懸命にやつてきたんです。それが、かへつてそのために反感を持たれ、叱られてばかりゐます。<sup>132</sup>

彼女は本島人の生徒を信用することが教育の質を向上させるという教育理念を被植民者側の人たちに伝える。植民者である日本人教師は台湾人教師と子どもからの信頼をもらわないと自らの教育理念がなかなか通じないことがある。作中に登場する公学校教員はかつて教わった女学校の教師を訪ね、教育の場での悩みを相談する。彼女は台湾人の生徒が大多数を占める公学校で働いているが、彼女と同僚の台湾人教員たちとの間には教育理念の違いがある。彼女は自分の女学校時代の教師が持つ教育理念を思い出して、女学校教師に相談を求める。当時の公学校教育における台湾人に対する教育方針に差別が存在しており、本作の主人公である公学校教員と彼女の恩師が持つ教育理念は当時の政策と違う。彼らの言葉を通して、台湾の教育を向上させるためには台湾人教師と生徒を信頼せねばならないと語られる。台湾の教育を向上させることは濱田がただ単に権力者としての立場に偏っていたことが思われがちであるが、女学校教師が公学校に対する教育理念が正しくないと語る作中の場面は、濱田の国家政策に対する考えが政府と違っていたことを示している。

それでは、自分が正しいと思ふことを人にわからせようとしたことがあるかね。たとへば、X[ママ]らんでも教育はできるつてことや、児童を信頼することが必要だとか、教師の權威も兩方からの信頼が土臺だつてことと

---

<sup>131</sup> 「横丁之圖」 p. 31

<sup>132</sup> 「横丁之圖」 p. 31

かを、會議やその他の場合に、強く主張したことがあるか。<sup>133</sup>

さらに、公学校教育が持つ問題を作品の中で描くことで、濱田は公学校の教育に対する意見を伝えようとしたのであろう。

小熊（1998）は、後藤新平が示した台湾統治における方針を記している。台湾を統治した際に、後藤は財政難という事情や台湾の風俗習慣を変えることの難しさを理解していた。そこで、日本国政府の方針として、予算を増加せず、原住民からの反発を避けるために「漸化」の方針で台湾を統治することに決めた。まずは国語教育を普及させ、台湾人を知らず知らずのうちに馴化させるというものである。台湾における教育では、修身と国語が重視され、忠誠心育成が強調された。その一方で、授業料が徴収され、日本の学校教育よりも科目が削減され、修業年限が短縮された。いわば、同化と排除が同時に行われたのである<sup>134</sup>。

日本が台湾を統治した際に、日本政府は台湾人を日本の国民にするために、同化政策を行った。同化政策とは表面的には台湾人を差別なく日本人と同等に見なすという方針である。だが、実際には教育・政治方面において差別が存在していた。同化政策に基づく台湾の公学校と小学校の教育を見れば、その差別の一端が窺える。公学校と小学校では使用する教科書が異なり、教科のカリキュラムも同様ではない。公学校から卒業した生徒は小学校の生徒より進学率が低い。さらに、小学校で使われている教科書は日本国内で使われている教科書と同じで、公学校で使われている教科書は台湾総督府が編集したものである。中等教育の試験問題は主に小学校で使われる教科書から出されるので、公学校を卒業した台湾人生徒にとっては極めて不利である。

このような差別が行われている公学校の教育に対し、「横丁之圖」では教育理念を実現するためには台湾人を信用することこそが土台になると述べられる。ここから、台湾の教育に対する濱田の考えが窺える。教育の中で台湾人と日本人の間に差別が存在している現実に対して、女学校の教師と公学校の教師が持つ教育理念を通して台湾における公学校教育が正しくないと訴えているのである。台湾での小学校と公学校の教育制度に差別が存在し、台湾人教員と生徒は信頼する対象とは見なされない。「教育はできるつてことや、兒

---

<sup>133</sup> 「横丁之圖」 p. 32

<sup>134</sup> 小熊『「日本人」の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』東京：新曜社、1998年。pp. 105-107

童を信頼することが必要だとか、教師の權威も兩方からの信頼が土臺」<sup>135</sup>であるという理念は、濱田がまず日本と台湾の間に信頼関係を築かなければいけないと考えていたことを示しているのだろう。

濱田はこの作品で写実的手法の実験を行っているほか、台湾総督府の教育政策に対する意見も提示している。この作品の中でも日本と台湾の間の力関係は対等な関係となっていないように見えるが、濱田は台湾人を信頼することを通して本当の教育理念が実現できると示している。この作品に描かれる教員たちは台湾人の教育に対して大きな責任感と理想を持っている。作中で濱田は権力者の立場から日本人教師は台湾人教師と生徒を教化すべきだと語る。これは当時の政府の立場を反映したものである。しかし、同時に当時の公学校教育が正しくないという意見も作品に見られる。このように、作品には政策に従うべきか、それとも当時の政策に対する自分の反発を表現すべきかという迷いが見られる。

「病牀日記」と同様、この作品でも濱田は当時の政策と違う意見を表現している。だが、権力の持たない人を心配する濱田の意識は、弱者を見下すまなざしから出発しているように見える。この作品では濱田が権力者として政府に従う立場にあったが、公学校教育に対しては国策と違う意見を持っていた。このことから、権力者としての自分と政府と違う考えの持つ自分との間での葛藤が濱田の中で生じていたことがわかる。

### 3.4 「行道」

「行道」は1941年『台湾時報』に発表された。この作品は「私」という一人称の語り手が「あなた」に自分の経験を語る形式をとっている。「私」は農科大学の出身で、大学卒業後に農園開発の指導のために南洋へ渡る。ある日、父親が病気になり、父親のことを心配する「私」は日本に戻る。日本に戻った後、父親の病気がよくなり、「私」は日本にある農学校に勤務をするようになる。ほどなく、結婚して子どもも生まれる。「私」は農学校で教務主任を担当させられる。ある日、幼少時代の友人で台湾で市議員になった人物が、東京へ陳情に来た際に日本より農村の景気がよい台湾に来ないかと「私」を誘う。それを契機に「私」は台湾に渡ることになる。台湾では教員として働くようになり、生徒を教育し、そのほかに台湾人を教化する仕事もする。

農学校出身の「私」が南洋へ行かざるを得ない理由を考えると、日本が南洋で植民地経済を発展させるために南洋での農業改革が必要であったことがわかる。戦争中、日本はい

---

<sup>135</sup> 「横丁之圖」 p. 32

ろいろなところで植民地を作った。台湾や韓国のほかに、南洋群島も日本の植民地として役割を果たした。作中の「私」は農学校を卒業してから、農園開発のために南洋に行ったと描かれるが、それも当時の国家政策の一つで自分の国を離れて南洋に赴いたのではない。南洋では日本の植民地事業の一環として大きな土地が官有地となっている。当時、多くの日本人が南洋に移住し、そこで農業を発展させた。上原（1940）によれば、日本国が南洋群島を植民地とした当初の目的は、栽植植民地と移住植民地と根拠的植民地という三つの要素があった<sup>136</sup>。つまり、南洋群島においてプランテーション式の農園で農業を発展させたり、日本の過剰な人口を減らすために人民を南洋に移住させたり、日本の政治や経済の戦略的な拠点として南洋群島を植民地とすることが大事だと考えられていたのである。

熱帯の植物を栽培することができ、北海道のように凶作がなく、農業労働が平均的に分配されることが南洋群島の長所であった。一方、日本人が気候に慣れず、農業を行うには肉体的・精神的に負担が大きいという短所もあった。それに加えて地力がすぐに消耗する土地不良の問題や、交通の不便のために生産物販路が制限されるなどの問題もあった<sup>137</sup>。南洋の土地所有権は官有地、邦外人有、島民有の三者にあり、官有地が一番多く、その次が島民有地である。官有地と島民有地との土地問題も深刻であった<sup>138</sup>。

南洋群島への移住政策として、当時日本国内の各地に南洋への移住の募集が行われた。南洋に移住した人々が開墾するには企業に土地を借りなくてはならない。南洋の多くの土地が官有地であるために企業が国から土地を借り、農民に貸し出した。当時人口過剰で食糧が不足し、「ソテツ地獄」<sup>139</sup>のさなかにあった沖縄から南洋に移住する人が一番多かった。南洋群島で農業を経営する会社の土地の使用目的は主にサトウキビの栽培である。沖縄ではサトウキビを植える経験を持つ者が多いので、南洋群島への移住に適していた<sup>140</sup>。

---

<sup>136</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。p. 8

<sup>137</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。pp. 15-17

<sup>138</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。p. 26

<sup>139</sup> 第一世界大戦時、日本がヨーロッパのかわりに一時期に市場を独占し、国内に好景気をもたらした。その好景気は沖縄にも及び、砂糖の輸出が沖縄の中心産業となった。しかし、第一世界大戦が終わると好景気も終わりを告げた。砂糖の価格は暴落し、当時8割以上の人がサトウキビを主な作物として農業を営んでいた沖縄では、経済危機と食糧不足に直面した。そのため、沖縄の人は有毒のソテツさえも食べないといけないう状況に陥り、ソテツの毒による死者も多かった。このことは、ソテツ地獄と呼ばれている。（新城『ジュニア版琉球・沖縄史』pp. 204-207 沖縄：東洋企画、2008年。）

<sup>140</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。pp. 66-67

沖縄のほかに鹿児島、宮城、熊本、山口、鳥取、愛媛、東京、福島、宮崎、山形、秋田、青森などからも多くの人が南洋へ移住した<sup>141</sup>。

南洋群島の農業政策と移住政策において、日本政府は国内の人口を緩和するために日本人を海外に移住させた。南洋で農業に従事した移住者の生活は順調であったとは言いがたい。南洋の気候が日本国内と大きく違うため、夏期の農作業は日本人にとって苦痛であった。そればかりでなく、帰国する際の補助が企業から出たものの、実際には南洋からの帰国は容易ではなかった<sup>142</sup>。以上のように、当時の日本の南洋への移住政策においては、日本人が自分の意思で南洋へ移住したわけではない。沖縄の人々は生きるために海外に移住せねばならない状況に置かれ、それに加えて政府も人口の緩和、植民地経済の発展、政治的な拠点としての利用などの目的で多くの人を南洋に送り出していた。

「行道」の主人公である「私」は、南洋から戻った後に日本で農学校の教員になる。だが、台湾から来た友人に誘われ、台湾に移住する。台湾でも「私」は農学校の教員として働く。台湾で教職に就くことが単に教員として生徒を教えるだけでなく、周りの人間を教化することでもありと作品には描かれる。台湾の人を教化する責任が与えられた「私」は本人の意思とは無関係に台湾に来て、台湾人を日本国民に教化することを求められる。

「私」が働く場所は、設立されたばかりの国語講習所である。その地域は、教化が足りないところであると思われる。そういった未開の地域で「私」は教化の仕事を担当させられる。学校での仕事は言うまでもなく政府の方針に従わねばならず、学校の周りの人々も政府の政策によって「進歩」させなければならないと作品は描く。

公学校も、分教場にそれこそ毛の生へた程度で、国語講習所もやつとできたばかりの、小作農の多いところでした。[中略]臺灣の殊に農村では、公学校が只生徒に教へるばかりでなく、部落教化ですか、父兄教育といふのですか、とにかく学校の外での働きが實に大切なんださうで、私共も、さうした教化方面の仕事をお手傳ひすることに否やはありません。<sup>143</sup>

「私」が台湾で教員として働く地域は、「国語もせいゝ四十パーセント位になつたばか

<sup>141</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。p. 52

<sup>142</sup> 上原『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會、1940年。p. 60

<sup>143</sup> 「行道」 p. 119

りの、云はば皇民化もまだ」といふところ」<sup>144</sup>である。そして、墓地を掘り起こすと悪いことが起るといふ迷信を現地の人々が持っていることを「私」は知る。これに対して「私」は台湾人民の価値観を変える必要があると感じる。台湾の中でも皇民化が不十分な地域に来て農業学校の教員となった「私」は、日本の一員として未開の地域を教化するべきだという責任感を有している。

ほかの作品と同様に、この作品も国策に迎合した作品であると見なされている。作中の「私」は一人の教師として、台湾で農学校関係の仕事をするだけでなく、生徒の親、学校周辺の環境に住む人々を教化する仕事を求められる。台湾のような「未開」の地域は日本のように「近代化」されることが望ましい。その「未開」と「進歩」という価値観は、日本が国民に与えたものだと考えられる。政府は教育を通して日本の美しさを国民に伝えている。教育を受けた日本の国民はいつの間にか日本の近代化に対して誇りが生じ、日本より未開の地域に来たら、そこに根づいている慣習を理解しようとはしないだろう。台湾は皇民化が不十分なところであると作品に述べられるものの、それは台湾が日本の国民になるのに不十分だという意味を持つのみならず、日本のように近代化していないという意味に読みとれる。当時、教師として学校での教育を受けた「私」は、それを内面化して個人の価値観にしていたといえる。

台湾人の教化も日本人教師が国家から負わせられる責任の一つである。日本人教師はいくら情熱、理念を持って台湾に渡ってきて生徒を教育しようとしても、国家からの政策に従わねばならないのではないか。国語講習所で国語を教えるのも当時の国家政策の一つである。その国策に基づいて台湾人を忠誠な「国民」にする。だが、「私」自身もまた国家政策に従わざるを得ない。濱田もそういった時代背景に置かれ、政府のために国家政策の方針を宣伝した。「行道」の中で濱田は国家の方針に従う内容を書いているが、本論文では「行道」を単に「皇民作品」として扱うのみにとどまらず、「私」が南洋へ指導に行くことも国家の指示に基づいて南洋に行かせられたためであると考えられる。そればかりでなく、台湾人を「皇民」として教化するという価値観も結局は国家から与えられた責任であり、「私」はその責任を負うしかない。濱田は国策の方針を宣伝する形でこの作品を書いたのだが、南洋群島の移住政策や農業政策を見ると、「私」が南洋へ農業を指導に行くのは自分の意思ではなく、国家の力で南洋に行かされたことがわかる。台湾に渡ってきて台湾人を教化することにも、国家の政策の枠内に置かれて自分の国から離れて移住しなくてはな

---

<sup>144</sup> 「行道」 p. 117

らないという側面がある。作中の「私」は友人の誘いで積極的に台湾に来るものの、台湾では教員の仕事だけではなく、台湾人を教化する責任も負わされる。当時の教員はたとえ理想を持っていても政府から与えられる責任からは逃げられない。その理由は「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」においても論じられたように、当時の教育によって日本を愛する価値観が植えつけられていたからである。そうした価値観によって、作中の「私」は権力者として政府のために仕事をしなくてはならない状況に置かれている。

### 3.5 「蝙蝠 (ぺんしい)」

「蝙蝠 (ぺんしい)」の初出は 1942 年に西川満が編集した『台湾文学集』である。松尾 (2001) は濱田の台湾での小説家時代を前期、中期、後期の三つに分けて彼の文学活動や作品の傾向を理想的な興味と体制的な興味に大別している<sup>145</sup>。その中で「蝙蝠 (ぺんしい)」は濱田の文学活動の中期に含まれる。この時期は、理想的興味と体制的興味の両方への傾斜を見せながらも、両者が並存している状態を呈していると松尾 (2001) は考える<sup>146</sup>。

「蝙蝠 (ぺんしい)」は日本人と台湾人が交流する物語である<sup>147</sup>。『文芸台湾』に掲載された濱田、西川満、龍瑛宗による鼎談では、「蝙蝠 (ぺんしい)」に関する批評が行われている<sup>148</sup>。その鼎談において龍はいつか内地人と本島人の交流や本島人の生活や心理を記録したいと語る。それを聞いた濱田はそのような素材が台湾小説に必須であり、内地人もそのような素材を題材に書かなければいけないと述べる。そういった意味で「蝙蝠 (ぺんしい)」では、円公園で蝙蝠<sup>149</sup>を売る少年と主人公の速河の友情を描いていると評価される。速河と陳少年にまつわる話は鼎談の中で濱田と龍によって詳しく解説される。龍と濱田は台湾人と日本人との交流を主題にする作品がまだ台湾の文壇にはないと考えている。その鼎談の中で濱田は「蝙蝠 (ぺんしい)」は濱田自身の経験に基づいており、台湾人と日本人との交流を語る作品であると述べる。

**龍 僕はいつか内地人と本島人の心理的な交流といふやうな問題と、それからこの時代の本島人達の生活と心理を記録したいと思ひます。**

<sup>145</sup> 松尾「濱田隼雄研究 日本統治時期台湾における 1940 年代の濱田文學」2001 年。p. 117。

<sup>146</sup> 松尾「濱田隼雄の「蝙蝠 (ぺんしい)」について」『天理台湾学会年報』11 号 2003 年。p. 15

<sup>147</sup> 河原「作家濱田隼雄の軌跡」台湾大学法学院、1998 年。p. 312

<sup>148</sup> 濱田、西川、龍「鼎談」『文芸台湾』1942 年 6 月。p. 34

<sup>149</sup> 蝙蝠とはワントンのことを意味する。中国語にすると雲吞、扁食に当たる。

濱田 それは是非なくちやいけない台湾小説だね。内地人の方の側からも手をつけなくちゃ。僕はそのスケッチの意味で、円公園の蝙蝠屋の少年と、僕との友情を書いた。<sup>150</sup>

上の引用から、濱田隼雄と陳少年との間の友情が「蝙蝠（ぺんしい）」に投影されていることがわかる。台湾文学にはこれまで描かれていない台湾人と日本人との交流を、濱田はこの作品の中心的な主題とした。本来日本人は統治者側の立場にあるが、この作品を通して、日本人と台湾人との間の交流関係が見える。

「蝙蝠（ぺんしい）」では主に教師と少年との間の交流が語られる。女学校教員である内地人（日本人）の速河と蝙蝠を売りながら公学校に通う本島人の少年との交流が描かれている。

それ以来、速河は圓公園に行くと、必ず陳少年の屋臺によつて、冗談を云ひ合ふのが愉しみになった。子供だし、國語が十分ではないから、相手が大人も内地人も考へずに云ふ少年の冗談は、遠慮會釋もなく、とても亂暴だつた。[中略]速河にしてみれば、言葉は荒々しく不作法でも、本島人によくある内地人の前に出るとおづおづと卑下する態度がまるつきりなく、のめめと明るく、ざつくばらんなのが好ましく、又、その亂暴な言葉の端にちよいちよい出てくる一種の機智も氣持よかつた。<sup>151</sup>

陳少年は國語がうまくできず、言葉遣いも粗野である。だが、速河は陳少年が日本人に対して劣等感を持つことなく振舞う点に気づき、他の台湾人とは違うと見なす。教師の速河は陳少年との間に存在する植民者対被植民者という関係を越えようとしているのではないか。陳少年は例外的な存在として扱われており、一般的に台湾人が日本人に対する劣等感を持っていたことが示唆される。被植民者は植民者に会ったときに植民者の持つ権力に脅え、植民者に対して劣等感を感じることが多い。けれども、速河と陳少年の間にはそのような上下関係が表面化していない。

濱田は女学校の教師である速河が出会った陳少年について描く。速河と陳少年との間の会話では、速河は陳少年に自分らしさを保ってほしいと言い、日本人の前でも劣等感を持たない陳少年は多くの日本人と友だちになれると語る。おそらく濱田は、台湾人と日本人

<sup>150</sup> 濱田、西川、龍「鼎談」 p. 34『文芸台湾』1942年6月

<sup>151</sup> 「蝙蝠（ぺんしい）」 p. 176

との間に対等の関係を築くことを夢見たのではないか。ここでも植民者と被植民者がどのように対等な立場になれるのかを中心に作品が描かれる。植民者と被植民者の関係は必ずしも緊張関係ばかりではなく、両者の間に友好的な関係が生まれる可能性がこの作品には見られる。

「蝙蝠(ぺんしい)」においても、教師は社会的に弱い立場にある人間に影響を与える。それは被植民者として自らを卑下するのではなく、権力の持つ植民者を前に自分の自信を保つことである。また、この小説によれば当時の日本人は台湾人のいる円公園に行くのが恥ずかしくて下品なことであると考えていたという。にもかかわらず、速河は円公園に行くのが好きだと授業中に公言してはばからない。台湾で生活をする速河は台湾人の居住する区域に行くことが恥ずかしいとは考えない。

日本人と台湾人との交流が述べられる「蝙蝠(ぺんしい)」においても、国策の方針に従うような内容が書かれている。だが、この作品からわかるのは、台湾人と日本人との間の関係をどのように維持するかを濱田が考えていたことである。作中では台湾で生活をする日本人は台湾人を見下してはいけないと述べられる。つまり、台湾を統治した植民者は単に台湾を植民地として見なすのではなく、植民者と被植民者との間に平等な関係を保つことが望ましいと濱田は考えていた。速河は社会的に権力を持った立場に置かれているものの、台湾人の陳少年に台湾人としての自らの価値を大事にするべきであると語る。それは社会的に権力の持つ人間が権力を持たない人間に対して責任を持つということなのではないか。作品では権力者には社会的弱者に対する責任があると語られる。それは権力を握る人々は弱い立場にある人の事情を考慮するべきだという思いがあると考えられる。前述の「病牀日記」と「横丁之圖」と同様、この作品でも一人の教師が社会的に権力を持つ者として権力を持たない者に対して責任を負うべきであると示される。そして、教師が日本人として台湾人との間の関係を平等に保っていきたいと訴える。「蝙蝠(ぺんしい)」においては台湾人と日本人との間の交流を語るばかりでなく、権力者側の立場にある教員が社会的に弱い立場に置かれる人々に負う責任が語られる。その責任というのは社会的弱者に自分の意識を育成させることである。社会の底辺にいる人々は不条理な状況にあったとしても、自分の権利を主張することができない場合が多い。そのため、権力者はそれらの人に協力し、彼らに自分を社会的に強い人に対して自信を持ってもらうようにする責任があると作品には見られる。この作品で濱田は、統治者が日本人として台湾という土地でどうすれば共に生活ができるかを模索している。その一方で、被統治者との間に平等な関係

を保ちたい気持ちも描かれる。そのため、この作品も「病牀日記」と「横丁之圖」と同じように、政府の方針に従う立場と社会的に弱い立場にある人々の味方になる立場の間に揺れが生じている。

つまり、台湾人と日本人との間の関係をうまく行かせたいという考えは、濱田の願いであったと同時に当時の政策による同化の一環であった。作品の中で、速河は台湾人に自分の価値を思い出させようとする。それは当時の政策に従う行為であるとともに社会の弱い人々を気にかける行為でもあったという解釈ができる。ここから、権力者としての自己と社会の底にいる人々の味方になる自己の間に葛藤が生じたことが見られる。

### 3.6 「地球儀」

「地球儀」は1948年に『学生』に発表された。この作品では一人称の語り手「私」が幼少期の体験、台湾に渡った後の教員生活、台湾での兵役、敗戦後日本に戻った後の生活について回想する作品である。

昭和二十年—八月十五日には、だから蒼くなつた。内地人だとえらそうな顔をしていたのが、まるで大名が足輕にてんらくしたようなことになつたのは、かなしいことでもつらいことでもなかつたけれども侵略戦争に、他ならぬ僕自身が協力したことは、思つても思つてもはずかしく、いきどほろしく、やるせないことだつた。中國軍が進駐してきても、僕たちはもとのわが家に住み、勝手に町をあるく自由を與えられたが、僕は肩をすぼめて、家につくねんとしていた。そして僕は敗れた故國に送りかえされる日を待つばかりであつた。<sup>152</sup>

上の引用からもわかるとおり、この作品の中心は台湾を統治していた日本人の地位が敗戦を境に一変したことである。敗戦後の日本人は維新後の士族のようになったと述べられる。中国軍が渡ってきた後、日本人は引き続き同じ家に住むことを許されはするものの、日本に送還されるのを待つしかない。教師の「私」は植民地時代の台湾における官員という高い地位にあるが、敗戦後は地位が逆転する。台湾人より高かった日本人の地位が、敗戦後には台湾人よりも低い地位に転落する。そのみならず、台湾を接収した中国軍が台湾に渡ってきた。中国軍が台湾を統治する立場になることで、それまで植民者であった日本は被植民者のような立場に置かれる。一方、台湾人の場合は日本統治時代と同様に被植民者の立場が続く。それでも台湾人は日本人よりは高い地位にあるといえるだろう。「地

---

<sup>152</sup> 「地球儀」 p. 16

球儀」では「教師」という役割を通して、台湾にいる日本人が持つ地位の変化が示される。日本に戻ってきた日本人教師の「私」は台湾で教職に就いていた。最初は台湾総督府の下で働いているので、「私」は台湾では権力の持つ存在であった。だが、敗戦になると、その地位が一変し、台湾での地位が逆転する。日本統治時代においては日本人教師は台湾で総督府から一定の権力が与えられ、台湾の社会において高い地位にあった。だが、敗戦後は日本に戻されて今までと違う地位に置かれる。日本では仕事がなく、社会的地位も一切失った。

「地球儀」は濱田自身の幼少時代や台湾に渡った体験、敗戦後日本に戻された体験などに基づいて書いた作品である。濱田の写実主義的な作風は、敗戦後も変わっていない。たとえ自分の体験をそのまま作品を通して表現しなくても、当時の社会的な状況は作品に表れているものと見られる。実際に台湾で教員として働いた濱田も、戦時中には台湾で教員として高い社会的地位にあり、敗戦後には日本に戻って以前のような権力を失って仕事しない状況を経験した人間の一人である。それでも、濱田は教員の仕事を続けながら、文学者として作品を出し続ける。「地球儀」では濱田が自分の経験を作品に反映したといえる。そのため、この作品には台湾で働いた日本人教師が時代背景の変化によって権力を失う中での教師の内心が描かれる。

### 3.7 「煙草」

「煙草」は1948年に『丹頂』に発表された。この作品では士族の家系に生まれた「私」の台湾での教員生活、兵役中の戦争体験、敗戦後の日本への送還と日本での生活について語られる。植民地時代の台湾では、「私」を含めて日本人は台湾人よりも高い地位にあり、その地位は日本の封建時代の「士族よりもはるかにえらかつた」<sup>153</sup>という。だが敗戦後は、「私」は植民者としての特権を失い、苦しい生活を強いられる。敗戦を境に日本人は中国軍や台湾人よりも低い地位に転落したためである。敗戦後日本に引き上げると食料さえ容易に入手できない状況が「私」を待っている。煙草を買うためにも長い列に並ばなければならない。ある日、「私」は神社でアメリカ人と出会い、煙草を与えられる。

背後で「ウエク[ママ]ト」といふ。ふりかへると別れたばかりの彼が大腿でひきかへしてきて「ユウスモウク？」ときく。「イエス」と答えたら、彼はポケットから美しい煙草を一箱出してわたしの手に押しつけながら、

---

<sup>153</sup> 「煙草」 p. 3

「MPにみつかつて、わたしに貰ったと云へばよろしい」とにこにこするのだった。<sup>154</sup>

「私」の地位の変化は、植民地時代から敗戦後にかけての日本人と台湾人との力関係の変化を体現している。上の場面では、行列に並ばなければ煙草が買えない「私」と新品の煙草を持つアメリカ軍人が対比され、アメリカ人と日本人の間の力関係が見られる。「煙草」には日本人教師と台湾人、アメリカ人の力関係が現れているのみならず、教師として台湾で権力者側の立場にあった「私」が、敗戦後には台湾での地位が逆転して日本に戻った後も弱い立場にある様子が描かれている。この作品は「地球儀」と共通する点を持っている。それは政府の力によって台湾で一定の社会的地位を保証されていた作中の教師が、敗戦を境にそれまでの特権が奪われ、台湾での地位が一変することである。さらに、彼らは日本に戻された後にも低い地位に甘んじなければならない。その変化の中で、権力を握った昔の自分を顧みると、今はもはや権力を握っていないことに気づく。この作品では「地球儀」と同様、作中の教師が敗戦後日本に戻った後の社会的地位の転換が描かれる。戦時中の教師たちは自分の意思で権力者になったわけではないにもかかわらず、政府から権力を与えられて台湾で生きていた。敗戦後に日本に戻った後にはその与えられた権力が奪われた。権力が与えられるのも権力が奪われるのも自分の意思とは無関係である。「地球儀」と同様、この作品においても権力を持つことと失うことの間で教師は葛藤を抱く。

### 3.8 まとめ

第3章では濱田の作品のうち教師と関係する部分の分析を行った。「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」と「行道」では、教師が「権力者」になる状況が描かれている。

「病牀日記」「横丁之圖」「蝙蝠(ぺんしい)」は教師が「権力者」として社会的に弱い立場にある人々に自分の意識を持たせる様子を描いた作品であると読み取れる。「地球儀」と「煙草」では台湾で権力を持っていた教師が日本に戻った後にその権力を失った過程が語られ、権力者の持つ権力が時代変化によってなくなったことが示唆される。

「病牀日記」に登場する湾生は、台湾人から見れば権力者の立場にあるが、台湾総督府の官吏や役人の立場とは異なり、実際には社会的に弱い立場にある。つまり、湾生の台湾での地位は台湾人よりは高いものの、統治者よりは弱い地位である。湾生は権力の持つ側

---

<sup>154</sup> 「煙草」 p. 14

にあっても権力者の権利は得られない。作中の教師の言葉は湾生の生徒に影響を与え、彼女に自分の身分に対する不満が台湾を愛することによって癒されると教える。

「横丁之圖」では、日本人教師が権力者として台湾での教育を向上させるために台湾人教師とともに教育実践をするべきだと語る。教育を向上するためには日本人が責任を持って台湾人を引っ張るの必要があり、その前提としてまず台湾人を信頼するべきだという主張が見られる。この作品では濱田は権力者として政府の味方になるものの、公学校教育が正しくないという点で示している点は政府と違う考えである。

「蝙蝠 (ぺんしい)」の台湾人の陳少年は社会の中で弱い立場に置かれている。作中の女学校教師は陳少年に日本人の前に劣等感を感じてもらいたくないと思っている。この作品でも濱田は権力者として被統治者との関係を描いている。濱田の内心にある権力者としての考えと社会的弱者に対する共感との間で葛藤が生じている。

「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」の教師は一見権力者のようであるが、戦時中の教師は自分の意思で社会的に強い立場になったわけではない。「行道」の教師も当時の国家政策に従って南洋に行くが、それも国家政策の枠に置かれたためである。

「地球儀」と「煙草」に登場する教師たちは、敗戦後に日本に戻った後にはかつての社会的な地位はなく、仕事が見つからず、昔のような生活は維持できない。彼らは日本社会の中で周縁化されることになる。このように、教師が台湾での生活と敗戦後に日本に戻った後の生活を通して、立場の逆転によって今までのように権力者の地位が奪われ、社会的に弱い地位に置かれる彼らの内心に生じる憂いが見える。

本論文で取りあげた作品からは、権力者の立場が時代の変化によって変わる可能性があることがわかる。作品に登場した教師は台湾で権力者にならざるを得ない状況に置かれている。ただし、日本が戦争に敗れると権力者側の人々は立場が一変し、台湾にいても日本に戻ってからも弱い立場になる。戦争の時代に生きた人々は自分の生きる道を自由に選べないことが作品を通して描かれている。一方、これらの作品には権力者と社会的な弱者との関係が語られる。それぞれの関係を見ると、権力者は社会的に弱い人に対して責任を負っていることがわかる。そのうえ、作品の中で権力者は国家の枠組に置かれているように見える。つまり、当時の社会において権力者は自分の行為が正しいと確信していたものの、国家の枠内からは逃れられないのである。

以上の7作品には、作中に登場する教師を通して濱田の社会に対する考えが見られる。濱田にとっては台湾での権力者が時代によって変化をし、権力を持った場合に社会的弱者

に協力する必要があると考えているようである。作中の教師を通して、濱田は社会的に権力を持つ人々は必ずしも弱い人に権力を押し付けることではなく、むしろ社会的弱者に対する責任を負っているのだと主張している。それは必ずしも統治者と被統治者の間の上下関係を意味するわけではない。統治者は被統治者をはじめ社会の下層に置かれる人々のことを気遣って彼らに自信をを保ってほしい解釈もあるのではないか。それにもかかわらず、権力者の持つ社会的弱者に対する責任があることは社会的弱者に対する無意識的な差別も生じる恐れがあることを見落としてはならない。また、濱田自身が国策に従うしかない状況に置かれているにもかかわらず、作品からは権力者の社会の中での立場の逆転、権力者が持つ責任、権力者がいやでも権力者として生きていかねばならない葛藤が描かれている。

## 結論

濱田隼雄は学生時代に社会主義思想に興味を持ち、社会運動に参加した。その後、記者として社会主義的な雑誌『実業時代』で働いた。濱田は1933年に日本から台湾に渡り、台湾で学校に勤めながら作家となった。当時の日本の統治下では自分の意思で作品を発表することが難しかった。特に1940年代に入って戦争が激しくなるにつれて、新聞、ニュース、雑誌に対する検閲が厳しくなった。濱田が台湾で小説や随筆を発表したのは、そういった時代である。

濱田は西川満が創刊した『文芸台湾』で小説や随筆を発表する。先行研究はいずれも濱田のこの時期の作品には国策に従う傾向があると評価している。だが、濱田のねらいは台湾総督府の政策に従うことで、日本文学の下に属する台湾文学独自の特色を発揮し、日本の文壇の注目を台湾文学に向けさせることにあった。台湾文学の発展に積極的な態度をとる濱田の考えは統治者の視点から台湾文学の位置づけを決めることである。濱田は文学が政治を押し進めるべきであるという考えを持っていたが、結局、国策に従って文学の発展を求めるしかない。また、当時のメディアは政府と結託しており、作家は政府の方針に従うしかなかったという点も見逃してはならない。前述したように台湾文学を日本の文壇に目を傾けることもあって当時台湾でのメディアに対する厳しい検閲制度もある中で濱田は台湾で発表した作品が国家政策を宣伝するよう見られる。

本論文では濱田が発表した作品の中で教師と関連する小説や随筆を分析したうえで、作中の教師たちが国家政策の枠内に置かれ、軍国主義的なふるまいを求められていたことがわかる。その一方で、社会的地位が高い教師たちは台湾社会の中で弱い立場に置かれる人々に思いやりや心配をかける態度も見られる。しかし、社会的弱者を心配する濱田が権力者の視点から社会の底辺に生きる人々を見ていることが興味深いことである。

濱田の作品には政府への追従が見られるものの、社会的弱者に対する関心も存在する。つまり、濱田は完全に政策に従っているわけでもなく、完全に社会主義思想を持って政府を批判しているわけでもない。この7作品からは、政府に従うことと社会主義思想を持って政府と違う考えを持つこととの間で揺れが生じていることがわかる。多くの研究では植民地時代に濱田が台湾で発表した作品が国策に迎合することのみが問題にされる。つまり、濱田が台湾で発表した作品には政府への批判がなく、政策を宣伝していると見なされている。しかし、当時は作家が自分の意思で作品を発表することはほとんど不可能であり、国

家の方針を作品に取り入れることが多い。そのため、この時代の作家が「皇民作家」であるか否かを判断するよりも作品に現れる葛藤を深く読み込まないといけない。さもないと、戦争中権力者が自分の意思で国のために犠牲になったり、政策に従わねばならなかったりする点が看過される。また、権力者が権力者にならざるを得ないことが作品に示唆されているように、作家たちに国家を賛美させ、政策を宣伝させる国家の力も考慮に入れなければならない。国の政策に基づいて作られた組織の中で生きるとは国家から与えられた思想や価値観で物事を判断することを意味する。そういった中で、当時は国を愛することや国のために犠牲になることが正しいと信じられていた。政府の作った教育システムに置かれる権力者の教師は国を愛する価値観を教え込まれ、国のために犠牲することが当たり前だと信じるようになる。だが、以上のように国家によって成り立った政策が教師の価値観を左右し、教師たちに犠牲まで強いるというのは単なる一例である。ほかにもいろいろな要素が存在しているかもしれないが、本論文では教師と深く関係する教育という要素を取りあげた。ただし、このように当時国家政策から身につけた価値観は時代が変わると崩れる可能性がある。

また、国のために権力者としての責任を負うことは、被統治者や社会的に弱い立場にある人々に対する圧迫になる。権力者本人は他者に対する圧迫や差別のような考えを持っていなくても、被統治者／社会的弱者を傷つける結果になるかもしれない。国家の枠内に置かれる権力者は権力者として果たすべき役割を果たすだけである。権力者が自分のやるべき役割を果たしたとしても必ずしも社会的に弱い立場にある人の助けになるわけではない。むしろ逆の場合になる可能性もある。本論文で取りあげる7作品では権力者は社会的弱者に対する責任があると示される。だが、それは権力者が無意識のうちに社会的弱者に対して差別意識を持っているという点も注目すべきである。濱田は権力者として社会の底にある他者に対する思いやりが見せるが、結局それは権力者として無意識に差別を行う例でもあるといえよう。この7作品のうち「病牀日記」と「横丁之圖」と「蝙蝠」はまさに権力者に社会的弱者に対する責任を感じさせる例である。しかし、湾生や台湾人生徒などに自分の意識や自信やアイデンティティを保ってほしいという考えには、被植民者や社会的弱者に対する権力者としての目線が存在すると見なされる。

一方、当時の台湾では、文学者が文学の力で社会的弱者のことを社会に伝えようとしても、政府はそのような作家を社会秩序を破壊する者と見なして弾圧し、文学作品の出版を制限した。その状況にある濱田が文学を通して政治を進めようとする考えを持っていたと

しても逆に政府の発した体制の下に生きていかねばならないことになる。作家は政府から出版に対する厳しい制限を受け、それまでとは異なる書き方で作品を発表するしかない。あるいは、何かの思惑があって政府の方針に従う。濱田隼雄は、まさにその状況に置かれていた。濱田が台湾で発表した作品が国策に従っているのには上のような事情があった。濱田が国策に迎合する事情を知ったうえで、実際に作品の分析を行い、「皇民化」の匂いがする彼の作品を深く読み込むと、社会的に強い人と弱い人との関係に対する彼の理想が教師の姿を通して描写されていることがわかる。濱田の作品では、自らが権力者として政府の味方になる反面、内心では政府の出した政策と違う考えを持つ様子が描かれる。それは濱田が自分の中で葛藤が生じた証拠だといえるのではないか。

本論文で取りあげた7作品には教師が登場する。その教師たちは、濱田自身と同様に、台湾で教員として働いている。彼らは一人の教員として弱い立場にある人々に影響を与え、彼らに自分に対する前向きな態度を保ってほしいと語る。作品にある日本人教師が政府の味方のように示され、権力者の立場に置かれる。しかし、それらの権力者は必ずしも自分の意思で権力者になったわけではない。「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」と「行道」という二つの作品では、日本人教師が国家の力で国のために犠牲になり、南洋に赴く。日本人として国家から与えられる教育方針で教育され、日本を愛する価値観を植え付けられて権力者になったのである。「病牀日記」と「横町之圖」と「蝙蝠(ぺんしい)」という3篇に登場する日本人教師は権力者として、社会的弱者に対する責任を感じると語る。「地球儀」と「煙草」では日本人教師が台湾で学校に勤めたときに権力者の地位に置かれたが、敗戦後になると権力者の立場が奪われ、社会的に弱い立場に置かれるようになった地位的な転換が語られる。それぞれの作品では、時代背景の変化によって権力者としての教師の立場が変わることが描かれる。それだけでなく、濱田の持つ葛藤も見られる。

日本植民地時代に台湾で作品を発表した作家には、しばしば皇民作家というレッテルが貼られる。「皇民作家」であるか、そうでないかという判断は研究者の個人的なレベルでの国家に対するアイデンティティの穴に陥るので、多くの研究では日本植民地時代に台湾で作品を発表した作家の持つ思想への判断が不明瞭になる可能性がある。つまり、日本植民地時代の作家たちの作品を分析した際に、作家の書いた作品に国家を賛美し、国家の政策に従うような書き方が見られるというだけで作品の価値が決められる傾向が見られる。それでは、作家たちがその時代に文学を通して読者に伝えようとしたことが隠蔽される可能性がある。それも本論文では日本植民地時代に台湾で発表した個々の作品を注意深く読

み込み、その中に描かれている作家たちの葛藤を無視してはならないという立場に立つ一番大きな理由である。

以上のように濱田の作品を分析することによって作品にある権力者の持つ葛藤が見られた。その葛藤を明確にしたうえで、当時の権力者は権力者として国から与えられた責任を負って生きていかねばならない。そのうえ、これらの作品によって政府の体制の下に生きていた権力さえ持たない人々の声も少し聞こえた。また、権力者として自分より弱い人々を気にかけること自体が弱い人々に対する差別を生むことも示唆される。差別が生じることに気づくことさえできない状況に置かれた権力者の姿が作品に見られた。

本論文では濱田隼雄が書いた教師と関係する作品を分析し、作中における教師の葛藤を明確にした。濱田は教師という権力者の地位にあったが、彼の今まで持ってきた社会主義思想と権力者という身分の間に葛藤が生じていたことがわかる。ただ、本論文では権力者、社会的弱者と国策に迎合することとの関係が十分に論じられていない。筆者は権力者が国策に迎合することによって、社会的弱者を配慮する感情との間に対立が生じると主張する。ただし、権力者が国策に迎合することと社会的弱者に対する配慮との関係は果たして対立的なものになるのかを考える必要がある。

そのうえ、濱田が日本に戻った後の教師生活にもあまり言及できていない。それは筆者が彼の日本での教師生活を描くような文献を手に入れることができなかったからである。本論文では濱田の台湾で発表した作品を中心に論じているものの、日本に戻った後の濱田の教師生活を知るためには、彼が日本に戻った後の作品を取りあげて分析する必要がある。

本論文では、以上の二つの問題点に対して十分な議論が展開できていない。以上の二点については、今後の課題としてもっと詳しく取り組みたいと考えている。



## 付録

### ① 日本植民地時代台湾メディアに 관련된法令<sup>155</sup>

1. 1883年4月16日新聞紙条例
2. 1887年12月出版権条例
3. 1893年出版権条例廃止、出版権法発布
4. 1898年新聞紙条例修正
5. 1899年3月著作権法
6. 1899年6月著作権法を台湾で執行する法令
7. 1900年1月24日台湾新聞紙条例
8. 1900年2月21日新聞紙発行保証金規則
9. 1900年2月21日台湾出版規則
10. 1902年4月22日新聞電報規則
11. 1904年1月5日新聞掲載禁止事項
12. 1904年5月18日新聞電報規則改正
13. 1909年5月新聞紙法
14. 1913年4月美術葉書を取り締まる法令
15. 1917年12月18日台湾新聞紙令

---

<sup>155</sup> 王『台湾新聞史』 p. 81。原文は中国語で日本語訳は筆者による。

## ② 1919年の台湾教育令の総則

第一条 台湾ニ於ケル台湾人ノ教育ハ本令に依ル。

第二条 教育ハ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ニ基キ忠良ナル国民ヲ育成スルヲ以テ本旨トス。

第三条 教育ハ時勢及民度ニ適合セシムルコトヲ期スヘシ。

第四条 教育ハ之ヲ分チテ普通教育、実業教育、専門教育及師範教育トス。

③ 台湾公学師範部乙科のカリキュラム<sup>156</sup>

合計	書道	体操	商業	農業	手工	音楽	美術	理科	数学	地理	歴史	漢文	日本語	教育	修身	科目
126		13	6	5	6	8	4	14	10	6	10	32	8	4	教授総時数	
			商業大意及び実習	農業大意及び実習	理論及び実習	単音唱歌、樂理、樂器使用法	輪画写生、黒板画	物理、化学、動植物、鉱物、生理衛生、救急法	算数、幾何	日本歴史、日本及外国地誌	時文、尺牘、古文の講読、作文	会話、講読、習字、作文、文法	心理学、教育学大意、管理法、台湾教育法規、各科教授法	人倫道德要領、作法		台湾公学校師範部乙科

<sup>156</sup> 鍾 p. 125 に基づき、新たに作った表である。

④台湾公学師範部演習科の各科目教育総時数配分状況<sup>157</sup>

合計	増課	書法	法制経済	英語	台湾語	体操	実業	音楽	手工	美術	理科	数学	史地	漢文	日本語	教育	公民	修身			科目
169						16	11	10	11	5	13	20	7	11	49	9		7	N <sub>158</sub>	1919年	
202			2	22	台日 8 15	18	8	10	9	6	20	22	15	台日 43 36	11			8	N	1922年	
238	12			8	台日 6 14	35	12	9	15	22	22	23		台日 47 39					N	1933年	

<sup>157</sup> 鍾に基づき、新たに作った表である。

<sup>158</sup> Nは修業期間の当科目毎週教学総時数を指す。

### ⑤台湾公学校官制附則<sup>159</sup>

第一條 臺灣公学校ニ學校長 教諭 訓導ノ職員ヲ置ク

第二條 學校長ハ各校一人判任トス辦務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ  
所屬職員ヲ監督ス學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 教諭ハ判任トス生徒ノ教授ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第四條 訓導ハ判任官ノ待遇トス教諭ノ職務ヲ助ク 訓導ノ俸給ハ臺灣總督定ム  
ル所ノ規程ニ依ル

### ⑥台湾小学校官制<sup>160</sup>

第一條 臺灣總督府小学校ニ學校長 教諭 助教ノ職員ヲ置ク

第二條 學校長ハ各校一人判任トス廳長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監  
督ス學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 教諭ハ判任トス兒童ノ教育ヲ擔任シ及學校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事  
ス助教ノ俸給ハ臺灣總督府之ヲ定ム

### ⑦台湾公立高等女学校官制<sup>161</sup>

第一條 臺灣公立高等女学校ニ學校長 教諭 判任 生徒監 書記 判任ノ職員ヲ  
置ク 各學校ニ付教諭ノ内一人ハ之ヲ奏任トナスコトヲ得

第二條 臺灣公立高等女学校ニ女子ノミヲ收容スル高等小学校ヲ併置スルコトヲ  
得

第三條 學校長ハ教諭ノ中ヨリ臺灣總督之ヲ命ス

第四條 教諭ハ生徒ノ教育ヲ掌ル 高等小学校ヲ併置シタル場合ニ於テハ教諭ハ  
前項ノ外高等小学校ノ兒童ノ教育ヲ掌ル

<sup>159</sup> 『臺灣教育沿革誌』を参照。pp .224-225。

<sup>160</sup> 『臺灣教育沿革誌』を参照。pp .427。

<sup>161</sup> 『臺灣教育沿革誌』を参照。p .819。

## 参考文献

### 1. 著作

- 濱田隼雄（1938）「鬼の傷心」『台湾婦人界』5月号。p. 44。
- （1940a）「やっちゃん戦死 森岡八千代の霊にささぐ」『台湾日日新報』1月23日、24日（全2回）。
- （1940b）「病牀日記」『日本統治時台湾文学日本人作家作品集 第四巻』中島利郎、河原功（編）。東京：緑蔭書房、1998年。pp. 5-15。
- （1940c）「愚教師迷語録」『台湾日日新報』3月29日、30日（全2回）。
- （1940d）「横丁之圖」『日本統治時台湾文学日本人作家作品集 第四巻』中島利郎、河原功（編）。東京：緑蔭書房、1998年。pp. 17-73。
- （1940e）「大会の印象」『文芸台湾』5巻3号（1941年）。pp. 17-21。
- （1941）「行道」『日本統治時台湾文学日本人作家作品集 第四巻』中島利郎、河原功（編）。東京：緑蔭書房、1998年。pp. 111-125。
- 、西川満、龍瑛宗（1942）「鼎談」『文芸台湾』4巻3号。pp. 28-36
- 、張文環、西川満、龍瑛宗（1942）「台湾代表的作家の文芸を語る座談会」『台湾芸術』3巻11号。pp. 8-11。
- （1942）「蝙蝠」『日本統治時台湾文学日本人作家作品集 第四巻』中島利郎、河原功（編）。東京：緑蔭書房、1998年。pp. 171-199。
- （1943）「大東亜文学者大会の成果」『台湾文学』3巻1号。pp. 63-66。
- （1948a）「地球儀」『学生』新年号。pp. 12-17。
- （1948b）「煙草」『丹頂』8月号。pp. 2-14。
- （1971）「文芸十話」『河北新報』1月（全10回）。
- 速河柁夫（濱田隼雄）（1942）「文化時評」『文芸台湾』4巻4号。p. 91

### 2. 参考書目

#### (1) 日本語文献

- 新城俊昭（2008）『ジュニア版琉球・沖縄史』沖縄：東洋企画。
- イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想：近代日本の言語認識』東京：岩波書店。
- 上田萬年（1968）「国語と国家と」『明治文学全集 44 落合直文・上田萬年・芳賀矢一・

- 藤岡作太郎集』久松潜一（編）。東京：筑摩書房。p. 44。
- 上原轍三郎（1940）『植民地として観たる南洋群島の研究』コロール街（パラオ島）：南洋群島文化協會。
- 奥野健男（1970）『日本文学史：近代から現代へ』東京：中央公論社、中公新書。
- 小熊英二（1998）『「日本人」の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』東京：新曜社。
- 川西政明（2001）『昭和文学史』東京：講談社。
- 河原功（1975）「中國雑誌解題—『文藝台湾』」『アジア経済資料月報』17巻2号。pp. 3-4。
- （1998）「作家濱田隼雄の軌跡」『近代日本と台湾』第1回日台シンポジウム論文。台湾大学法学院。pp. 307-320。
- （2005）「日本統治期台湾での「検閲」の実態」財団法人交流協会。
- 黄振原（1996a）「濱田隼雄『南方移民村』論」『論究日本文学』63号。pp. 22-32。
- （1996b）「濱田隼雄の『草創』について：戦争と濱田と『草創』」『文学と教育』31号。pp. 24-32。
- （1996c）「台湾時代の濱田隼雄：その人と作品」『文学と教育』32号。pp. 17-31。
- 島田謹二（1940）「外地文学研究の現状」『文藝台湾』創刊号。pp. 40-43。
- （1941）「台湾の文学的過現末」『文藝台湾』2巻2号。pp. 3-18。
- 鍾清漢（1993）『日本植民地下における台湾教育史』東京：多賀出版。
- 周玟玲（1984）「濱田隼雄の文学を研究する：『南方移民村』を中心に」東吳大學碩士論文。
- 台湾教育会（1939）『臺灣教育沿革誌』台北：台湾教育会。
- 垂水千恵（1995）『台湾の日本語文学：日本統治時代の作家たち』東京：五柳書院。
- 陳藻香（1998）「濱田隼雄のヒューマニティ：「黄燦榮君」と「木刻画」」『台湾日本語文学報』12号。pp. 65-108。
- 戸田一康（2004）『日本植民地時代台湾作家が描く公学校の教師像（日本領台時代的台湾人作家所描寫的公学校教師形象）』東吳大學日本語文学系博士論文。（タイトルの日本語訳は筆者による）
- 濱田淑子（1984）『濱田隼雄年譜』仙台：明窓社。
- 藤井省三（1995）「「大東亜戦争」期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立：皇民化運動から台湾ナショナリズムに至る道」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作

- 家と作品』下村作次郎ほか（編）。東京：東方書店。pp. 73-107。
- 松尾直太（2003）「濱田隼雄の「蝙蝠（ぺんしい）」について」『天理台湾学会年報』11号。pp. 13-61。
- 萬里光悦（1943）「今月の人・濱田隼雄氏」『台湾芸術』4巻11号。p. 11。
- 百瀬孝（1990）『事典昭和戦前期の日本：制度と実態』東京：吉川弘文館。
- 柳書琴（1995）「戦争と文壇」中島利郎（訳）。『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』下村作次郎ほか（編）。東京：東方書店。pp. 109-130。
- 龍瑛宗（1940年）「文芸評論」『文芸台湾』1巻6号。pp. 493-495。

## (2) 中国語文献

- 井出勇（2001）『決戦時期台湾での日本人作家と皇民（決戦時期台灣的日人作家與皇民）』台南：台南市立圖書館。（タイトルの日本語訳は筆者による）
- 王天濱（2002）『台湾新聞史（臺灣新聞傳播史）』台北：亞太圖書。（タイトルの日本語訳は筆者による）
- 朱惠足（2003）「ロマン主義における移民の先鋒：濱田隼雄の『南方移民村』および「内地人」農業移民（浪漫主義之下的移民開拓先鋒：濱田隼雄《南方移民村》與「内地人」農業移民）」《南台應用語日報》3號。pp. 148-162。（タイトルの日本語訳は筆者による）
- 松尾直太（2001）「濱田隼雄研究 日本統治時期台灣における1940年代の濱田文學（濱田隼雄研究日本統治時期台灣1940年代的濱田文學）」国立成功大學碩士論文。（タイトルの日本語訳は筆者による）
- 郭祐慈（2006）「文学と歴史：濱田隼雄の『南方移民村』の文学史上での位置づけ（文學與歷史：濱田隼雄《南方移民村》之文學史定位）」《台灣風物》56巻3号。pp. 105-138。（タイトルの日本語訳は筆者による）